昭和七年五月上浣起筆

自娛叟錄

五

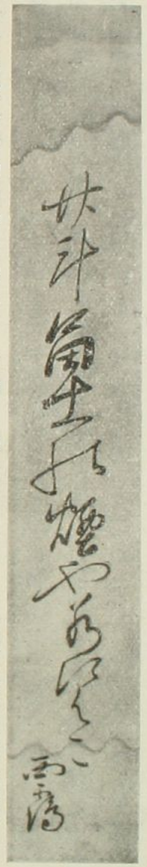
特別
14
1919
441

薄霧はかさ屋もしらぬ袂哉　西鶴

大阪　高安六郎氏所蔵

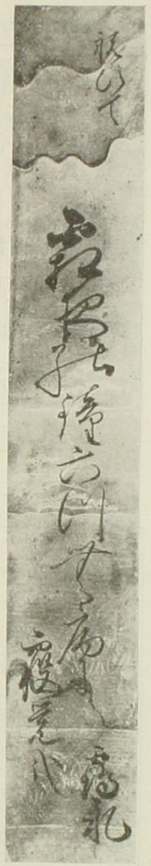
折釘に本尊かけたか鳥の籠　西鶴

（大阪　森繁夫氏所蔵）



廿斗富士の煙や若たばこ　西鶴

（東京　松山米太郎氏所蔵）



霜夜の鐘六ツ無病の寝覚哉　鶴永

（神戸柴田氏所蔵）

大晦日さだめなき世の定哉　西鶴

大阪　崎野平三氏所蔵

38- 9227

176706

自映奄録

昭和七年　六月上浣起筆

○花の宗匠集来る其の著書と題字を乞ふ予
味噌糞蹴花の四字を書して其の
花の趣い奇も無くして疎なる想ひ
花を愛撫する
ものの美なる美しさ可知美しい多き
を感ずる美を愛すれば花愛
術も此心得無ければ恐らく似て非なる
業する所也

○五月伊豆山の相模灘に飛来する白鷺
を訪ひし時拙書道遙の額面に刻印と

嘗て多の入口に掲げあり、手紙にて云んとする時主人揮
毫を乞ふ、即ち額の下に認し一行の人と共に宮
寺、須田相撲屋らし家もこれ紀念とも
家を存ず、一行の内離騒社中の人若干あり、皆し
ンガを入る、金ちやく熱海を起けとも熱海と存する
小田原の家を立つのとこんとの多也、相撲屋も
余の揮毫の額と共に保存して可也
○左の井月と云へる俳人井月の句いまゞ
諸人と見る機会なかるべし、僅の人らも示さんも酒の句
二三を掲ずる
時雨酒に四の五の云いさめぬぞ
初松魚酒に四の五の云いさめぬぞ

早稲酒や難波も昔の笑ひ形
時雨くや酒も酒もうきさ尾
酒あらと云ふまもなく花の君
○早稲田大学も大紀摸と云ふ紀のいろ〳〵異漢が出
る、大稲荷あり、を威嚇し一夢四捲上げ数
授かあり、悟物物を思ひ入りて御物三体を窮め
し比校友もある。此等の大海と深ぶ塵芥のごとき
ものであるが大きなるが故に個物なるもの出る
○も物寫真が満蒙祝賀に出うけと物来る所を学く
を高のもの、バかりである。吉の毎日の新聞を見て、おもを
が分つておるかれ思つておるとそうでいうと、実際の○金
く教いんと新聞に掲載さんないとこの実際ひある。実

際の市情に就ては日本の軍部の或る階級のものは誰れも知つてゐるまつたくである。それで報道が官憲のいことは甚だ多く掲載が禁ぜられて全く暗黒時代である。その秘密を探知して多くの者は、軍部の怒りの觸れ易き社の運命を恐れてどの新聞も書かない。支那の方面で実情を探つて内閣の物の校友等の談話を聞いたが、甚だ口を緘めてそれを断つたと云つてゐる。満蒙の新国家と云ふも今は明らか混沌たるもので、新国家を何等の権力がなく、日本の武力で抑へ、強いるものとして神印さへ捺すのだ、新国家の支那の要人達は捕虜の如き扱ひである。攝政も而して事実は全く空名の業にすぎず、内閣の幸に過ぎ

複写製

しかと云ふが、なるほど拝謁の式は全くなつてゐるが、それが実の後で どうなるのか、外部は摂政が左右のまゝ皆皇帝 扱をしてゐる。許金者は宣伝皇帝の印を捺してゐる と云ふ有様だから、後で事となるのも知れぬが、実際 曖昧のものである。新国家の要部は日本の若手が入つて 占めてゐるが、駒井が事実の首相であるといふ。軍部と ひつしり肚が合はないものは利権要職を就き難く、云はば 武力政治で攝政と吳も捕虜の如き扱である。馬占山の逃げ出したのは 二千馬元の金を兵士達に渡した後で、彼は命が惜しく部下から殺される 危険があるので、新国家を出ようとしても出す為えすら 得られなかつたので逃げ出したと云ふが実は拐されたと云ふ

此男が拙者の出発を携帯して逃げ出したらしいのだ、軍部でも氣を揉んでゐると云ふ、或いはブザーワーとどが馬から内容を聴へて居りはせまいかと思案した居るといふが、若しさういふ報告を祝賀会が為したとすると、馬占山の様子を偵察したと考へられるから、武力の威迫に脅威を感じたと云ふ、満蒙も今日の事件に関ひさく硬ばあると云ふ実際化と云ふ、満蒙も今日の事件に関ひさく

匪賊の出没は日々二十回も繰返されて、満鐵沿線も今迄武装されて、鐵條網や鹿柴などは今日は除くことの出来ない状態で、自衛団が出動し、客車内の数人宿隊が乗つてゐる、危険があるから、普通の旅客は一切夜間の旅行が出来ない時勢未だ真の平和が到来致しおが

出来ないので、其の匪徒の主に成つてゐる村は全部焼棄するのであるが為めに日本は府とならつてゐる。

六農民は親閥の為めに耕作が出来ない為めと鐵道の沿線に耕作を許すと匪徒が潜入するからと云ふので或る地域耕作を禁じた長るので農民は迫害の収穫の又迫害のを強奪し、其の数が実に大数である、之れを自然と他かしたら満蒙はがう昭きまるる筈である。軍部の精神へ移る

純良であつても政治経験のないと云ふ。軍他性のあるが為めに行政をよくし得べきや、其次の如きは明らかに憂慮すべき秩父の宮を忠言を呈したと云ふが矢張り軍部行政の危険を申上げたのだと云ふ、あと文へて見ること

滿洲國の建設と要位に立つ新潟港

重大生命線吉會線の全通（三）

國際貿易より見たる新潟港

今滿洲國の物資集散地代表都市及び鐵道連絡の大要を左記A圖につき觀察するならば吉會線の全通が我國對滿貿易に對し決定的要素を持つに至ることは識者の賞しく認識する所である。

A圖

浦鹽港
吉林
安東港
新京
ハルビン
長春
チチハル
奉天（大連港）
營口港
敦化
釜山港
ハルビン
長春
新京
チチハル
兆南

然るにB圖に見るが如く吉會線の終端港雄基または滿洲は海波四百七八十カイリを距て、新潟港と相對し、日本海岸諸港中の最短距離を占め、新興滿洲國の將來を豫約するが如き觀にあるものである。

B圖

長春
吉林
雄基
四九〇理
四八二理
四七八理
四八六理
四八七理
四八〇理
四八〇理
四九〇理
小樽港
函館港
新潟港
敦賀港
伏木港
舞鶴港
下關及門司港

加之新潟港は最近の國際貿易の傾向は昭和二年における對大連港輸入貿易高は約六萬噸、價額三百萬圓なりしに昭和六年にありては倍輸入高三萬噸、價額九十萬圓に激減したりとはいへ、對浦鹽港輸入貿易高は昭和二年の三萬噸、價額二百萬圓に對し昭和六年には一躍九萬噸、價額三百萬圓あに增せり、如斯は對東亞貿易の中心が日本海沿岸諸港に伸展しつゝあるの趨勢を物語るもので、北滿開拓の鍵を握る吉會線の開通は本港の利用價値を更に倍加せしめ、日本海貿易の大呑吐港たらしむることは言を俟たざる事實である。

而して國際貿易中の主要輸入品は肥料、原油、木材、石炭、鐵鑛石、鹽魚類、大豆等にしてこれに對する主要輸出品は漁業用品、食料品等にてこれ等の輸出入關係の對外各港は關東州、滿洲、支那、蘭領アジヤ、北米合衆國、英領印度、佛領印度、アフリカ、獨逸等なるに想到せば日本海諸港の將來が國際通商のために愈よ期待さるゝことの大なるを痛感するものである。

工業上より見たる新潟港

新潟港は工業原料の輸入に又製品の輸出には完全なる施設を有し、從つて荷役諸經費の低減を見る等遺憾なくその機能を發揮してある更に本港に連接の數十萬坪の宏大なる地域は、海陸運輸至便にして最適の工業地帶として嘱望されてある、又本港の背面地域は東京を始め關東北の廣範圍に亘り、しかもこの間は羽越、磐越、上越及び信越等の鐵路によつて聯絡が保たれ、一面工業經營の重大要素である、石炭も本港により低廉に得られ、殊に電力については全國一二の發電地點の所有者で地元電力會社の如き本邦に發電しその量頗る豊富で遠く東京方面の遠距離に送電してゐる位だから、之を地元工業に消費するにおいては更に低廉なるものを充分に供給受けられるわけである更に勞働賃銀も至つて低廉で且勞働能率の大なる等彼これ企業上有力なる條件を具へすでに製油、パルプ（製紙）、硫酸肥料、綿糸、製絲等各工業の活躍を見てゐる。

國防上より見たる新潟港

先に新潟飛行廠は東京朝日新聞社の東京、新潟間郵便飛行開始さるるや、昭和四年四月信濃川下流萬代島に假飛行場を設け臨時廠となしたるも、翌年六月市外松ケ崎濱附地の廣大なる海濱砂漠地を卜して現飛行廠を經營するに至つたのである。翌上海、大阪、新潟、東京間の航空路はやがて新潟、北朝鮮沿岸港又は浦鹽港を經由し日露兩國航空路の接續により歐亞連絡地點となるや疑ひを容れない而も昨秋滿蒙の地一度雲の低迷するや、滿洲交代部隊幾千將士の輸送港となりし等の諸點より推察せば、獨り産業貿易他展上のみならず國防上本港の如何に重要なる位置にあるかを知るに難くないのである。

觀光上より見たる新潟

舟江の里或は柳の町の稱ある新潟港の中心としては附近には少からぬ風光を藏してゐる。即ち新潟附近には彌彦、角田の靈峯あり、又瀬波、鷹ノ巣、月岡、村杉をはじめ温泉相當に豊富であると共に、春は日本一の稱ある加治川堤の櫻、秋は阿賀野川沿岸の秋色その他名所舊蹟少くないのみならず舟江美人の「おけさ踊り」觀賞の適地である、更に新潟港よりその名もゆかしき「おけさ丸」にて佐渡へ二時間半、渡れば佐渡の金山金北山あり、眞野宮及眞野御陵さては日蓮聖人、日野資朝卿遺蹟其他沿岸の風光明媚なる充分探勝の價値がある（完）

満蒙の将来に関する重要なる問題
よい気運にうつりゆくと、トンデモない
い

○奈良山中其古墳の発掘中を潜り四五金がハ出来
中のものを獲た中に絵を彫り写未彫の印刷あり、四
個の内一個は高山の玩具印と云しあるを見て、玩具は
北校のものもあることおもしろく思ひたが、実は自分の
幼少の折、和尚の寄意が石印いろくの絵画を彫つて其
ことを思ひ起す、見る人物もちろん禽虫も多く花草も
あつた。毎朝乳母を促して熟意の居られた所を
行つて見ると、前庭に絵の印を書くんとの
んうひどく嬉しかつた。考へてみるとそれも玩具である
がさて新る玩具を作る場合のあるものであることも
思ひも寄らぬ。高山は北の玩具の
ことを知つた、自分は印癖のあるとく、或は寄意

標原製

が無つくえに絵の印は刷除してあるかも思ふが、
新るものを玩具とすることは一般児童に同じ効果
があるこも知れん。東和と感じれる他に得れるく
内は牛を刻し此小枝木があつた。えは何を注してゐる
が天満宮の守護札の枝らしく思はれる。山谷橋の
昆沙門堂の印と仏法僧法の印とは共に木彫で
お寺の時代がある。陶器の擂鉢一個えは共古
の注がある「唐中の年れ北端鉢」名を書て北に向て
流れる川へ流すと病難を除くと信ぜられて大阪府に

れちさうこゝあるうし」とあるが北海
後に今も存する獏、寶の牧つち
木彫うそ王子稲荷の子あり、こゝ九
今存するやをやをもりそ、外に唐
こま一個、原始的玩具ふるべ
き較々大形の鳥木彫、首も頭
もはめはづしの出来、甚だ粗略
なれども古雅也

の粘土ろくろ彩色の時代あり
ち森の産物としても赤十和田
粘土のレガレット、おんがし
うが、雁首の形ハ十和田の
えこ。パニソラの名のあるのん羅甸語の曲つれ角」と

意義から明らかである。古墳の出し本国古墳ちがう宮
セんとしたから小器等中のものとして
○帝室博物館の漢文化展覧会が開かれてあるの
で此の一覧した。漢を中心として夏殷周の遺品を
陳列し、約百五十點の遺品が陳列されたのである。北支の
展観としては空前のものである。日本では漢代の珠
玉の久しく絶滅の河を行ハれたが、夏殷周の遺
品は従前日本では手に入らず重宝され、漢品と共も
住友家蒐集の弐十點のみきん話題になれのみで
ある。金をくれたんべとんるものも敢も難しと
しての今の時代に於て、実力ある趣味家に向う飾
獣の遺品が支那から持来ることは、真に我国

の特色である。夏殷周と云へば今から四千年も前のこ
とで、その頃の文化はどんなものであるか
推化家味と想像し、その外に無いのである。遺品が無い
殊に五代の銅器
あるものは
遺品
遺品
意味の文化があったことが歴然とし
て居る。真に驚異に値するものがある。漢時代に降
つても西紀五世紀頃であるが、文化は既に進んで
祭器を始め装飾品を見ると堂々たるものが
ある。中でも金製の特色の装具、銀製の人物
豆物を始め鍍金の鏡、黄金の鈴具
玉、燦爛目を奪わるものがある。北等のものは
朝鮮の楽浪郡から出土したものから生時
さんとみた、北の郡は漢の武帝の植民地であつ

周漢文化展覽會出品目錄概要（順序不同）

一、東京帝國大學文學部考古學標本室出品
漆槃、漆鏡奩及鏡、漆坏、漆劍鞘及鼻、瑇瑁釵、瑇瑁指輪、耳環、杖頭、硝子板張菱文羅、同平絹等。

一、東京帝國大學工學部建築學教室出品
蟬文平瓦、鐙瓦等。

一、京都帝國大學文學部考古學標本室出品
殷墟出土彫文骨片、甘肅省出土石器類等。

一、東京美術學校出品
殷墟出土白色土器、金錯盤殘片、金錯筒形銅器、銅刀、鍍金脚金具、璧等。

一、朝鮮總督府博物館出品
銅壺、金銅壺、博山爐、銅鍑、銅鼎、銅携奩、黃金鈒具、熊脚付漆案金具等。

一、平壤府立博物館、平壤高等普通學校、同中學校出品
瑇瑁龍形環、秦二十五年銘戈、鍍金龍文把銅劍等。

一、細川侯爵家出品
金錯龍文盤、端方舊藏蟬文觶、金錯山岳鳥獸文筒形銅器、銀人物像、銅人物車馬、銀坏、金錯鉼、戈已銘端方舊藏戈、明器案及坏等。

一、住友男爵家出品
乳虎自、饕餮文卣、饕餮文甗、鴟鴞尊、鍍金熊脚獸環奩等。

一、塩原又策氏出品
饕餮文自、同斝、同尊、同蟬文方尊、同蟬文尊、同鳥文鬲、同雷文爵、壅龍文彝、同盉、同渦文彝、蟠螭文鐘、同文豆、帶鈎等。

一、正木直彦氏出品
綏和年銘金銀錯銅壺。

一、中村不折氏出品
殷墟出土骨彫文字片、秦二十九年銘戈、秦權、秦量、永壽年銘土器等。

一、山木悌次郎氏出品
蟠螭文扁壺、虎鉦鐸、旅鈴、端方舊藏伯歸銘彝等。

一、武内金平氏出品
鱗文豆、金錯鼎、饕餮文斝、直文鬲、獸環壺、壅龍文戚等。

一、守屋孝藏氏出品
怪獸唐草文銅小盤、鳩杖頭、玉勝、漆坏、瑇瑁櫛等。

一、清野謙次氏出品
戚、獸環金具、熊脚、帶鈎、銀錯軸頭、轡金具、鳥形轅頭金具、金錯劍佩金具、銀錯鼻、釭頭等。

一、橋都芳樹氏出品
西王母唐草文銅盤、銅坏等。

一、大塚稔氏出品
甘肅省出土彩色土器九個。

榛原製

以上漢代の文化を語ることが故墳から多く堀出されたことも出来るのである。列品は一々挙げることを略するが、左の如き列品の特に優秀なるものを選び、説明を加へて置くことにする。

（五月十二日記）

大要が判ったと思ふ。

自分の面白味から垂涎のこゝろ若干を附記する。

細川侯の銀製小人形　日本の山本悌二郎の神鈴　樂浪郡出土の方形枕頭金具　羊形同上具　洛陽出土の金銅鐙形脚（漆槃附屬）　朝鮮博物館の黄金製帶鉤具　其他製鉄文奩具等

などは特に余のオレンジを捨てゝ撮影したものである。

北内の二三は後でゆっくり撮影したものである

他の遺志に倣へば左に二三の事を述べ記すべ
樂浪郡出土品の中には前漢の漆器をとる出陸さん
てゐたる、漆杯漆盤漆鏡奩、獸帶鉤劍の
漆鞘などがあるも、なほ多数の物ありて
ある、日樂浪郡の前漢の遺物は推古天皇の年日本の手に帰
ふたるべし、漢の相続
を経るものがあるべい
黄金製の鈕具も樂浪から出土し、黄金板を中
央に超起し、面の中央に雌雄の二龍と六匹の龍子
を浮出し、龍の輪郭の外に別に雲文に金鍍を
施す、金鍍に沉えて大小の金粒を箔飾し、且又
所々にトルコ石の寶石を填充してある、なほ物

榛原製

巧のものがある、こんに絵をこうきさ
紀伊府博物館
乳虎鼎は住友邸中の逸品にして前と同じ
もあるが、この器は全体が獸形をなし前脚の間の一竜
況を懐いてゐる。左傳魯の宣公四年の條に、楚人
楚國の令尹子文が初時南に嘯乳されたとの石
まを守りたるとき乳虎一回の名が附せられて
ある、獸の後脚と尾とを以て器体を支へ、頭上な
は一本獸を載き、背後に雷紋を飾り、又
提梁は獸首と象とを表はしたるものである
樂浪から出たるものは内に漆樂と云ふ平安の如
きものがある、漆樂は有柄てゐるが、金鍍の

無形の四脚や美に附帯する金属製の装具が石
英しるみるが、無形脚は高の古のものが塗金かしてある
これも絵えうきやうのある。幸に細川侯の見事が
無多と金形のものが有なしもみるべき、漆器も美
こ様の形の意匠が難くるべ
○二日尚図書殿大人の令旨に元北東科学博物館
館は帝国室博物館の前面の道路に出来北まび
入つて見るのはとなる蛇めである。主流を遺物とあるが
紀模の大なるべ、秋保館長の流を模ると、手続び
木名の別館まむ陳列場を完てみると云ふ、北
館の出来る前の科学博物館と云ふ、お茶の
水の器平翼を設けられんとまんびちうとが美

横原製

も極めて少紀模び品つた、美が大震災に焼けた
ので科学博物館が皆無となつたが大震災に
災は免かれたが、或人と倒潰した帝室博物館
が其後復興の方針を立てる事となり、館長の自
然科学に属する標本一切を元り陸軍今後の美
術品をも置くの方針を立てた、元り陸軍
北標本は第二部の数八十萬と云ふ
大数で、美を基本とした北の東京科学博物館
館を出来た。但一般北の六千坪は宮内省
ハ下物を係ると云ふ
○北陸口ヒヤから玩具やうの工業品が日本輸入さ
れ銀産の一店に来つてある先は木服の金鍍

数碑を残したが、此の岡しも庭を設けたり、たゞ古い石刻の碑
共が多く出除さんをみたが、茶と川條と共の三碑を市
めて出つた、茶の白毫の里碑のある石、川條い鼠色
の石、共い茶褐色の石こゝに彫刻されてゐた、皆立さ一
寸二分許の小品である、刻法も特色を見るものゝ
造型であるが、何れも共に十数を満たすものであり
値のものである所も特色がある、皆ウラルの産で
ある

十月十四日記

○仙基出身で曾て久しく新潟の知事三岡吉敬を経
営し、今い基隆港務府の岡吉敬長官をもつてゐる
山中樵が出府したので、酒次ぎに大概家から盤
渓翁の寧静閣集の題木金部を頂く受

榛原製

けた話をしたまへ山中の勧めるまゝに仕かた、仙基の岡
吉敬と之れを保存することが出来る事を得て長く
忍ぶ処、自分の唯だ焚材を供さうのを惜んで、僅う
ばかりの金を代へて得たのであるが、実に之れを保存
することが面倒だ、現在引元つてゐる宝、受けはけず
直ち出版部の庫と新潟入れ出やうの仕末である。
仙基の岡吉敬が余らもの好を主人として受け、
つゝんを珠玩すること甚だ厚く、余も誠に本懐である。
山中は目下仙基の銀長と交渉中

（日上記）

○維新後の文化施設としても新潟と英学校と開いた
のは六十数年前のことで其の設備や学校の内容
などに就て今記憶してゐるものはいくらもゐない、自

なりとも聊うさく記臆するに
事実の湮滅を惜むることを要くて敢て雑録するに
記臆するあることを筆に記し、当時在世の一二の先輩
から受へたことを補足し、御四の記録と連載し
九切り板と称してゐるが、これは不完全なるを以て
活字板の版式をもつて、これを改めたい、あ
の頃の教育状況は全く闇黒とでもいふべき何等かの折
に之れを印刷に附し、当時の日誌が時折借せ合こ
示したいと思つて居たるも、毎つに也沢
市四教育会から、余の小学の時代の事を思
出を書けと頼まれて、教育会の校の大変を考き
迄つたが、これの校めて大略であつて、日誌に欠けん

とすることのハ印刷に附して二十数頁に亘るものに
なる。今は文化協会の二二ヶ月載せと称ふ
る任せて漸やく印刷する機会を得たが、これ
を校き掛り二十部を作つて見た、即ち不日発
行の予定なれば、今日完全
なりしもの、あるべきも、後進であるから、余の
もつて以上のことを知つて居やうとハ思ハるれば
とも、教育の要ありとの思ハ、此等である。
市の出席とそれとの拘らず在世の人々に分ち
たいと思ふのである。此思ひ出を附かれを要することの
市時の校則であるが、これを更して貴誠と
する。北海道の春風漫談中より校

別に就て所感を述べたるものを収めて置いたが、後日参考まで附言する。（五月十四日）

○五月十四日　静嘉堂文庫に書誌学の会員の人々をひらきぬ。この日清水の話、北文庫は岩崎家の有る所もと品川にあり、この前年ここに新築して移したる也、北は北多摩郡砧村字二本木とかいてある文庫不在也、北は丘陵にして廣大の地域にして岩崎氏の墓あり、十七間長に亙り特に文庫を伴なうて建てたるものなり、三層の書庫あり既に二十六箱を蔵す、二百宋板と支那陸心源の蔵書もここに納めあり、宋板は高山日本第一なり、他に版本書多く、北文庫の後に立

榛原製

て居りし頃参考にする為に墨本を閲覧したるものなり、書庫内は温気を除き乾燥する設備もあつて用意周到也、特別保存する人に閲覧を許すとこと、陸心源旧蔵本も其他岩崎氏の手を加へ一時一トわたり閲覧せしことあり、その内僅に数点の宋版陳列あり、廣勢の一点を除く外（これは八雲軒の印記なり）皆陸の蔵書にて、黄丕烈の印記あるもの其の自筆の題跋あるものも見へたり、大抵左に収むる目録の如し、附陳のものは特に寿昌人の研究の為めに出したるものなり、北中まで十カシものもあり、支那人が旧本などを宋版と

吳書二十卷　晉陳壽撰　宋裴松之注　宋咸平刊（南宋修）　六本 28

影譜第二輯參照、

爾雅十卷　宋邢昺撰　宋咸平刊（元修）　五本 1/45

影譜第六輯參照、

白氏六帖事類集三十卷　唐白居易撰　宋刊　十二本內六本 4/55

每半葉十三行（二十四至七字）小字雙行三十四五字不等白口左右雙邊版心記帖一至十二等字無字數刻工姓氏魚尾等每卷目連屬本文宋諱敬殷匡恒等闕末畫舊說以為宋仁宗時刊本首有陸存齋手識（捺文淵閣印等印記）傳氏雙鑑樓舊藏本八六帖ニ作リ、福井氏崇蘭館藏本（零本卷二十二至七二八）刻工ヲ記ス、即チ宋刊本ニ三種アルナリ、校勘紀談（六）斯文參照、

廣韻五卷　宋陳彭年等奉敕撰　北宋刊（仁英宗間）八雲軒ノ印記アリ　五本 101/33

影譜第一輯參照、

廣韻五卷　同右　宋刊（覆宋）　五本 1/53

右ノ覆刻本ナリ、校勘紀談（六）參照、

周禮殘本二卷（卷九、十）　漢鄭玄撰　宋刊（孝宗、光宗頃）　二本 1/20

蜀大字本、影譜第六輯參照、

黃丕烈跋

詩集傳二十卷　宋朱熹撰　宋刊（寧宗、理宗頃）　抄補　六本 1/20

纂圖互註禮記二十卷　漢鄭玄注　附禮記舉要圖一卷　宋刊　十六本之內八本 1/30

右二種影譜第六輯參照、

纂圖互註周禮十二卷　漢鄭玄注　附周禮經圖一卷　宋刊　十二本之內六本 1/23

每半葉十二行行二十一字注二十五六字雙行細線黑口左右雙辺有耳宋刊建本

後漢書一百二十卷　缺　宋范曄撰　唐章懷太子李賢注　宋嘉定刊　三十二本之內五本 2/4

每半葉八行行十六字注雙行二十一字細線黑口雙闌有耳。存紀一至十、志一至九（版心間有字數）二十三至三十、傳一至四十八、目錄末有嘉定戊辰建安蔡琪一經堂木記

春秋經傳集解三十卷（存後半）　晉杜預撰　宋刊　八本 1/36

每半葉八行、行十七字注雙行線口雙線有耳版心記字數刻工卷十七廿四至六、二十九末有相臺岳氏刻梓荆谿家塾木記、卷十九至二十二、廿七、八以明覆本配（其他各卷亦間有數葉

□論語註疏解經二〇 元刊、六本○明本九經排字直音二明初刊二本○勘忍百箴考註四 版心一、二、三、一 叙末
正統刊 八本○批點分格類意句解論學繩尺一〇首一 明成化刊本 游萍序 廿一本之内六本 叙末
以上 書物春秋參照、

□白雲集四 應安七年俞良甫刊本一本 影譜第三輯參照、

□(一) 九經 十四本 (二) 選編省監新奇萬寶詩山三五 廿二本之内八本 (三) 宋史四九七
一百二十本之内六本 (四) 友林乙藁一 一本 (五) 羣經音辨七 四本 毛抄
(於玉川、靜嘉堂文庫、日本書誌學會第五回例會

しく見せかけて、種々狡猾手段を用ひ、或は文字を傾換し、或は改竄し、或は刪削して一笑を禁じ得ざるものあり、係し女の手あるべきを巧みのうをウツカリ見ゝ、多等も無き歟かゝる花蹊あり、陸四前本中にもかゝいしきこと、荒千混入し

あることを知り得べし。

日本中の漢書二十卷は三國志を屬まんまとこんへ專刻單行の本にて日本と二十卷を上下に分ちたるも四を存し、其、黄不列、顧莊、陳鱣、徐宝[illegible]の手跋あり、著名の秘[illegible]

影譜第二輯に收めあり

爾雅は注疏合刻以前の形式を具すこと[illegible]

嚴文官印を捺し宋の天子の諱を闕筆す赤縄

版七行にあり、此の標本は影譜第六輯[illegible]

廣韻は現存廣韻の刊本中最古のものなれども他の

宋本は皆ち此本の覆刻なり、此書は雲軒の

標原製

印記あり脇坂安元の舊藏なりと云ふ。竹添光鴻の
造詣といふ影講六輯に收めあり
周禮　二卷の零本なれども百宋一廛以來有名の秘
籍なり、復翁此書を獲るの始末跋に詳かなり
大字の刊本は板式蜀本と見做さるれども真の
蜀本にしてなるべき歟影講に收めあり
纂圖互注礼記　麻沙本と称するもの多くは俗書
なれど拙刻なるもの多し、之も麻沙坊
本なれども稀なる佳本也、刻も精遒偉也
影講六輯に收めあり
他に月令の注毒しけんべ別に注せずして
此の長洋紙鉅也り鎮倉南北朝期に於ける外典

の翻刻と題するパンフレットを贈られる。これは主に
島田翰の古文舊書考の研究を正しくするもの
なれど未だ閲讀を終らざれども有益の書に属
田の舊書考は世に多くの誤りあり、之れを
なる弱る出版者なれど人を誤ること少かるべし、之れを
正しくするは長洋の手柄也
此の豆江版文選を持参の今度なり、黄丕烈流布
本なれども尾に黄氏の年號を欠
き版文の位置も黄氏の跋宋本と異なれども黄
氏は版文本文の終りの次きの行を割りあるべへ
一行間隔を置き跋文を載せたり、何分のを略
々討論したれども帰後に達せずして止む

此の今橋を於て支那の四庫全書の索引を一見し得
たいと思ひ其事を於て出版のものも二冊本を得
引と置いあり、引きこの方文部流をもつて面倒
也、文求堂より直ち二寸四方の印の捺し
陸心源の舊藏本を一人拓を回し、なるべく上級を年
あるを見る、これは陸の肖像を刻したるもの、自家肖
齢を刻す、毎年年の夢の改刻したるが、自家肖
像を印す、刻するも一形式なるを失はず、
○伊豫宇和島の久保貢といふ人、早大在学の子息
を以て山陽貴の覆の硯の鑑定を乞ひ来たれ
のびえを流し、研を指の世帯の時の不義の西鶴の
像をも指く事を示せとして送り所、先ひ上京

して西鶴の像を示さんとの
誌に掲げられたるのを陽二説を紹れたるものの
つたが、真筆を見ること、なるも拓額の躍動なる
かあつも大阪所人の見はいを難い。惜いまつ小
さきものである。西鶴の住所が丸に花菱である
ことも此時を伝つて初めて明らかにされた。田廣する
し三百年二十数年の昔しとなつて今が後四で大阪
、長浜寺中一日西鶴の墓を訪ねたことがある其
此漸せく墓の存在が知られと云ふ位で久しく荒
草乱離の河の埋没したものであるが、自分の尋拓当つた時さやしく
と思つた。寺の坊頭に尋へても其所へ知り合なる

西　鶴　墓　（上本町誓願寺）

井原西鶴翁肖像　芳賀一晶筆

藏所　和歌山市久保貫氏所藏

おどのようなものであつた。今新紙「上方」から徳と養とを
、の切抜き四収めておく。芳賀一品、京の人で医業
とし後会徳に俳諧を学び終りも活能であつた。此
人名は治兵、通称玄益、異重堂、岩比山翁等
の別号あり、著書入門、物類、十郎集、八宗無陣
三種著法等の著書もあり。晩年江戸に住し
寛政元年四月没、享年六十三歳で弟子もある。（青
十五日記）

西鶴の著作は他人久しく埋没してゐたらしく、浮世
草紙の子の寒月が二束三文と買つたものが更生
の始まりで露伴やお幸の鼓吹で西
鶴本を浪人と見て、第文才を驚ろき、遂に第

第版に倣ふやうなるうつた。西鶴は一世の宗師
を傷するやうなるうつた。第を浮世草紙から、西鶴の
書いた経界をば今こそあらくさらるる
家を孫重さる、やうなるのが、一時の容易な手
を入らず二千を入つても第の真贋を定めることと
も出来ずうつた。自分が大阪に出張してゐた頃
は露伴が俳句をやるばかりで西鶴の研究
から出来た。第つて四方人を指めた時分に西鶴の意
を示さんとのを見たから、西鶴の跡から
とのである。第の序文こんなことも思きつけ
ておく。左の長歌は「上方」所載のものだが、珍品と
してこゝに収めておく。

西鶴作の長歌

□色　香

定めなき色香に浮かれ國あまた、かたい枕も垢つく衣も、なりやつれたる身のゆくへ、懺悔に語り申さん、抑江口神崎は名のみ殘りて風俗なし、野上の里は草枕、朝妻舟は枡枕、誰こがれけんあと知らず アヒノテつかひ揚げたる島原を、都の西に入日影、移る心に焚付の、柴屋町には火も立てず、化粧かはりしづし君を、はるゝ〳〵こゝに三越路や、鹽津海津にどれ〳〵それ、あれ〳〵針が浦、釣するあまのうけなれや、心一つを定めかね、敦賀小萬の吸付煙草、きつくなづめば目もあはぬ〳〵、目がまはる、女郎と契らぬ旅人には、夜著も借さいで寺泊、お草臥なら寝まるべいとて、わさゝの酒をしひざかい、四の五のづしを出雲崎、おなじ流れの酒田のひしやく アヒノテ 底宜實から三下リ解けてちんちんちぎりの、幾夜も結ばん常陸帶、掛卷くも〜水戸の藤柄 枝川躑躅、明日のわかれにや散々に、おさらばへ、これちかのうち ホテウシいとしけりやこそしとゝ打て、憎かり打たりよか、何んでもこれはあいた〳〵、潮來出島のこん小手招き、まねく袂に文や玉章 アヒノテ 實に楓橋の夜の市、泊々宿々の窓にうたふ群女は、客を留めて夫とす、別れあれば待つ暮あり、品こそれかれ戯女の、袖吹返す飛鳥風、昨日と過ぎて今日と暮れ、武藏の國なる新吉原がとまりぢや

□春　日　野

三下リ 春日野のわか紫の摺衣、忍のみだれかざり知られぬ我思 アヒノテ おく露のしづ心なき秋風に、うつらふ人の濃むらさき、花紫の萩がえに、亂れみだるゝ心のつらさ アヒノテ ホナウシ その繰言のまたの夜に、君ならでよんよん餘所にはさあへ、色にはうつさじささへ、むらさきの色に心はあらねども、深くぞ人をおもひ染め、かひも渚に我裡しぼる、人目人目忍ぶの其通路の、舟にうち乘りお敵達はこぬかの、うちのせよせつ、幾度思ふ宿の首尾、とは思へども只ひと筋に、この譯知らぬ人ならば、たとひ萬にいみじきとても、玉の盃手に觸れよ アヒノテ しやんとさせ、底はいよ〳〵知られぬか、君に逢ふ夜はまつ乳山 アヒノテ ニ上リ 手にふれて アヒノテ いつしかも見ぬ紫の、ねに通ひゆく轉寢の アヒノテ 君の〳〵濡こそ アヒノテ じづとは見えぬ、しんぞ此身は神ぞ此身は涙脆うて、憂いぞつらいぞ、枕もろくばかり〳〵 アヒノテ わけの〳〵宵には アヒノテ いよ絆さるゝへ、しんぞ此身は〳〵涙脆うて、ういぞつらいぞ枕も浮くばかり〳〵

榛原製

□時雨の真と恐怖の一夜であつた。南の偽と日暮の際く、都の西の休刊とも、歸の早く刊着とも、事打い唯に うゞ大とも〜ぞくの

みであつたが、大義昔書物の内府を驚愕し北報が傳ると日ぬゝ驚く祝庭日本の政本部、驚いれたとの報もあり、首相は重傷を受け生命危篤と傳くられ、深夜内閣全滅が海陸軍の内、紀委沒幹部の急命が海陸軍主脳部の重大要命が聞かれとゝ驚きて實を答あるこゝと思へた。時夜まもなく北の震い突然のゝ如くに行われたゝ陸海軍共に十年以來の大事件の運動であるが、陸海軍の重大である。役等の撤去最上に宣傳者と伝つても、アアッレ三運動であることは確かである。コン

十年が早晩訪ずしとの要望の為の為れこ
とであつたが、自分の早くから認つた事は結果をる
ると、軍の首脳一人を犠牲に供したのみで他いすべ
て要路を得する事つた。暴漢が陸海軍一人で
あるからまた竟祝廟の手を合はぬ、若し今あり
く大規模な暴挙であつたら、或い革命者を
帯いたかも知れぬが幸にそこまでは行かなか
つた。兵事の寝床のうじ大臣(原敬)ニエース
を聴き驚と感官睡眠を得ようた。五月十五日
およそ革命家の軍隊に前ざすると危険の
といない、とおの一挙い壮年士官等の暴挙であ
つがしく見えるが背後にどんなものが潜んでゐる

標原製

警視廳へは二人亂入

爆弾を投げつけた、爆弾は大音響と共に破裂したが牧野内府は生命に別條なくかけつけた請願巡査は怪漢の發射したピストルで負傷した

十五日午後五時卅分頃櫻田門外警視廳正門左側の入口で突然圓タクを止め海軍將校服を著た怪漢一人と陸軍服を著た兵士二人が圓タクから出て突然警視廳正門に向つてピストルを亂射したので驚いて往復係書記永坂弘一(三)讀賣新聞記者高橋巍の兩名が飛び出すと件の陸軍軍曹の服を著た怪漢はピストルを擬し永坂書記の頸の下を貫通創を負はせ高橋記者は脚部に負傷した怪漢は直ちに乘つて來た自動車で逃走したが逃走の際ガリ版で刷つた美濃版紙大のビラを撒いて逃走した警視廳では直ちに總監官房主事總務部長に急報犯人の檢擧に大活動を開始した逃走の際撒いて行つたビラの内容は『日本國民に檄す日本國民よ』と題し『祖國日本を直視せよ立て！眞の日本を建設せよ！昭和七年五月十五日陸海軍青年將校同志』とあつた

日本銀行へも襲撃

日本銀行へも五人一組の一隊がやはり自動車で乗りつけ鎖されてゐる正門のところから庭に爆弾を投じて逃げ去つた

〔裏面へ續く〕

明治廿五年三月八日、第三種郵便物認可）

東京日日新聞

昭和七年五月十五日（日曜日）

號外

電報略號 印相 東京

大阪營業部 東京支店
堂島紅梅町三番地
十一番地三號
東京日日新聞發行所

首相官邸をはじめ帝都の各所を襲撃

現役、豫備陸海軍々人

警視廳第一回發表十五日午後七時、十五日午後五時廿分から卅分までの間に麴町區首相官邸へ陸海軍々人七名乃至九名が自動車で乘りつけ正門からピストルを擬しつゝ屋内に押入らうとしたので官邸の警官がこれを阻止するうち四名がこれを拒みピストルを亂射しつゝ奥深くに侵入し女中にも發砲し負傷せしめなほ奥へ亂入し直ちに怪漢は憲兵隊へ自首した、一方同時刻ころ政友會本部にも數名の陸海軍々人が自動車で乘りつけ手榴彈を投げつけ破損せしめて逃走した、同時刻警視廳にも六七名の陸海軍人が三台の自動車で乘りつけ手榴彈を投げ更に廳員および新聞記者にピストルを亂射して引揚げたほか芝區三田台町の内大臣私邸および日本銀行、内務省をも襲撃した事件があつた

犬養首相は遂に重體

一彈右こめかみから命中

一彈は鼻孔下より左頰へ貫通

犬養首相の負傷は未だ明瞭ならざるも一彈は首相の右こめかみに命中更に一彈は左の鼻孔下より斜に左頰に貫通し首相はその場に打ち倒れたりと傳へらる、傍にありし田中氏も又彈丸命中、犬養總理は官邸内で田中氏は犬養健氏の官邸に擔ぎ込み青山博士木村博士がかけつけ手當中である首相は重體である、官邸前には病院自動車が用意されてゐる犬養首相は午後八時官邸病室で輸血を行つた

牧野内府を襲撃

十五日午後五時廿分頃芝區三田台町内府牧野伸顯伯邸に陸軍將校の制服を著た二名の怪漢と伍長の制服を著た三名計五名の怪漢が自動車で乘りつけ添門から侵入玄關目掛けて爆彈を投げつけた、爆彈は大音響と共に破裂したが牧野内府は生命に別條なくかけつけた請願巡査は怪漢の發射したピストルで負傷した

警視廳へは二人亂入

十五日午後五時卅分頃櫻田門外警視廳正門左側の入口で突然圓タクを止め海軍將校服を著た怪漢一人と陸軍服を著た兵士二人が圓タクから出て突然警視廳正門に向つてピストルを亂射したので驚いて往復係書記永坂弘一（三）讀賣新聞記者高橋巍の兩名が飛び出すと件の陸軍軍曹の服を著た怪漢はピストルを擬し永坂書記の頸の下を貫通創を負はせ高橋記者は脚部に負傷した怪漢は直ちに乘つて來た自動車で逃走したが逃走の際ガリ版で刷つた美濃版紙大のビラを撒いて逃走した警視廳では直ちに總監官房主事總務部長に急報犯人の檢擧に大活動を開始した逃走の際撒いて行つたビラの内容は『日本國民に檄す日本國民よ』と題し『祖國日本を直視せよ立て！眞の日本を建設せよ！昭和七年五月十五日陸海軍青年將校同志』とあつた

日本銀行へも襲撃

日本銀行へも五人一組の一隊がやはり自動車で乘りつけ鎖されてゐる正門のところから庭に爆彈を投じて逃げ去つた

（裏面へ續く）

政友會本部へ爆彈

午後五時卅分麴町區內山下町政友會本部へ自動車で乘りつけた一隊のうち二名のカーキ色服を著た壯漢が手榴彈を手にして正面玄關に駈けこみ二個を投擲した、一個は大音響とともに爆發し窓ガラスその他を破壞したが一個は不發である、この騷ぎに本部內に居合せた人々が駈け出すと怪漢は逸早く自動車に飛び乘り銀座方面へ姿を消した、破壞は極めて輕微で負傷者はない

左傾右傾にもあらず
吾等は國民別働隊
襲撃團の撒布したビラ

白晝大膽なる犯行をなした襲撃團が引揚げに際し自動車から撒布したビラは「日本國民に檄す」と題しまづ冒頭には日本國民よと呼びかけ政治、外交、經濟、教育、思想、軍事の現狀を慨し更に政黨の腐敗を嘆じて今や日本を救ふものは武器をとつて立て—天皇の御名において君側の奸を屠れと激越なる口調を以つて論じ最後に吾等は左傾右傾何れにも屬せぬ、吾等は國民別働隊であると稱し陸海軍青年將校農民同志と署名してある

陸海軍々人十八名
直ちに憲兵隊に自首

首相官邸はじめ各所を襲撃した陸海軍々人はすべて十八名で麴町憲兵隊に自首して出た犯人中には海軍中尉五名、陸軍士官候補生十一名、その他豫備役の陸海軍々人が含まれて居ることが判明した

武裝した警官隊で
高官の邸宅を警戒
警視廳極度に緊張

事件發生と同時に警視廳では大狼狽をなし大野總監、村木官房主事、大津警務部長、松本刑事部長、林保安部長、上田衛生部長、早川消防部長ほか警衛課長、係長らが警視廳に登廳し各襲撃された個所についての被害情報をまとめ一方各大臣私邸、高官私邸等には非常召集した警戒員を派したが事件が事件だけにいづれもピストルを携帶の上部署についた、廳內はこの突然の各方面に起つた突發事件に煮えくりかへるような狀態で憲兵隊とも打合せの上暴行犯人檢擧についての協議をつづけてゐるが午後七時には海軍省副官も急遽警視廳へ總監を訪ひ事件についての協議を行つた

政局に重大變動？
政府當局協議を續く

十五日東京における大官、官廳の襲撃事件は表面突如として行はれたが、その裏面には容易ならぬ計畫を包藏するものの如く政府始め各方面とも異常の興奮裡に事件の眞相つきとめと善後處置に關し協議をつゞけつゝあるがその結果、政局に重大なる變動を來すに至るものと見られる

驚愕の閣僚重大協議

爆彈事件に關し鈴木內相、床次鐵相はじめ各大臣は十五日午後六時より首相官邸に急遽參集し、犬養首相の負傷を見舞ひたる後これが善後處理に關し重大なる協議を行つた

廳し各襲撃された個所についての被害情報をまとめ一方各大臣私邸、高官私邸等には非常召集した警戒員を派したが事件が事件だけにいづれもピストルを携帶の上部署についた、廳内はこの突然の各方面に起つた突發事件に煮えくりかへるような狀態で憲兵隊とも打合せの上暴行犯人檢擧についての協議をつづけてゐるが午後七時には海軍省副官も急遽警視廳へ總監を訪ひ事件についての協議を行つた

政局に重大變動？

政府當局協議を續く

十五日東京における大官、官廳の襲撃事件は表面突如として行はれたが、その裏面には容易ならぬ計畫を包藏するものの如く政府始め各方面とも異常の興奮裡に事件の眞相つきとめと善後處置に關し協議をつゞけつゝあるがその結果、政局に重大なる變動を來すに至るものと見られる

驚愕の閣僚重大協議

爆彈事件に關し鈴木内相、床次鐵相はじめ各大臣は十五日午後六時より首相官邸に急遽參集し、犬養首相の負傷を見舞ひたる後これが善後處理に關し重大なる協議を行つた

か、能合使嗾者が無いとも此時社會を騒擾せしめるファッショ運動が軍隊と支配者とを分離して、革命がそこに起らうとすんでゐる後の事情は決して容易なものでない。政黨者流いろいろの暴挙を挑発する責任をいろいろとなくめ、政黨政治が腐敗して社會の信を失つてゐるから、所謂ファッショ運動を利用することが起るのである。忠味の多數を取る政黨が善後を果し得るか疑ハ大なる問題である。

日本の政治家と對する輿論は稍死的で、英人と陸外例がうく解釈過ぎる。政治家の首相となる時は此の事時此の事

[illegible]報酬を受ける受領が無かりせば、[illegible]犬養首
[illegible]内[illegible]共[illegible]情[illegible]あり[illegible]
聞くハ四十八年[illegible]あるから[illegible]令[illegible]もそ[illegible]
[illegible]時[illegible]ハ首[illegible]の[illegible]切れ切れ[illegible]ハ[illegible]至[illegible]雖至重び
[illegible]の内味噌を[illegible]つけも良くらも、定式の報
酬で死ぬ為め優[illegible]かも知れぬ。[illegible]茅ハ海流上の
立場こそ異なれ犬養[illegible]久しい間の交りもある、
今[illegible]の変れ氣の毒の感ハあれども、若しも
を得[illegible]ハ帰院と[illegible]者を云ハしむるのハ今の[illegible]
今の悪世相が為す業である。　十月十三日記

○文行堂にて二の回書を購ふ

農業雑要　三冊

北書元の日農司撰出所本谷の一也
[illegible]、無界写本[illegible]銘柳湾の花記
あり、写[illegible]字書体柳湾の自写に似た
り、各冊の末に明治二十年四月[illegible]舟
閲了とあるも[illegible]の印を捺す、[illegible]舟
の手写本と[illegible]くも

圭峯禪師の侍法碑

此の碑原の悲体の書[illegible]本[illegible]余
[illegible]の謹[illegible]の正書を愛し常つて家を
集めて一二[illegible]碑を低りしことあり
今回[illegible]大隈侯[illegible]国民敬慕の碑を
刻[illegible]亦此の碑[illegible]の字を集

めいきんを摸大して刻す、而して市価の法帖を有する事、寡客の用に供するを瑞瑞的に附する上海の廉価帖也偶〻古刻一帖を得るこの巻美湖の鳥巷と属し、是、余の字義の如き也拓本頗る可、至巻中に置くべき也

七種考

所写本也 彩色の図七頁を収む、本草学者流の著也 七種の目云くスナヘ、ヌシロ、芹、薺、立行、タビラコ、仏座、田こあらいまたのものえ也 七種に春

模原製

秋二種あり、本邦賞する所のもの秋の七種に属す、尚他 二十六種あり、美しき七草は荊楚の遺俗と酷似し本邦亦これと倒あやひさし

寛永十六年 古文状七巻

上下巻の摸本あるを読み難けれども鷹司師を作称するものを鑑別し給へしきこのハ江に阿部郎所左事つゝ此を伝出べしとあり給ふ頭に結印らしきこの二顆を捺し給ふ。一は「護」字一は「憲」字、鷹司の此印を不拓して拓とす給ふ尚考べし

（五月十六日記）

○若し蜀山人書庭訓往来の元の錦絵と言ふものあつて狂歌の名歌を掲げ「富士は天に」と言ふ題歌

富士のねにうぐいすばかりうちつけに　ほととぎすこそ鳴くしらめ

かゝりし春の夜かのきき

ある時四方赤良と称する狂歌師が蜀山に来て錦絵の上に狂歌を寄せ

う許へ嘲笑の意を寄せ

年元び書歌ごんくまで錦絵の砧の音に打ち

消されけり

こんな歌し錦絵に入れて座敷の一矢を放つた

四方あるじくといいぶかしい君が名の砧の音い

かがい四五町

複原製

と言ふ意味で武手はいどぎもを抜かれ

蜀山の門下に鶴の穴主と言ふがあつた（通称清瀬左

左衛門と言ふ名主さん）蜀山はからかひ半分に

吐へその穴主　祖母の門人　背丈三寸の下に

めまはと

穴主も負けぬ氣で

かくすべき脇の穴主見つけられ　丈三寸の中

御存知

山東京伝の家に来客があつたとき京伝が畫領の旅

子の鳴焼を出した客の狂歌に

加子さく瓜實かぢかに　さし竹油　まけにとくい

東條の反歌

油つけくしをとゝ〜はいはんがゝ名のくろいに
味噌をつけとり

○今回の大事件の責任は軍部に在ることは勿論であるが、軍部の行動は秘密にされて、所謂国民さんとは、事件発生の後に於て、軍部の責任を輝つて居るものは無い、軍部の後援を厳命した大臣が輝ひるのと云ふが実際である。事実軍部の無節度無節制の驕き入つとある。上官の威令を行はきこと能はざるもの多き為に生ずる結果である。

木陸相の如きは、板垣の狼狽をしたと云つてある。今度代つた陸相とゝなる杉山と云つてある。山本も就て云ふ人の語るを聞くに、此の事件関係者の者の命運動が起りつゝある。山本の高く日本力を発揮したことである。将校が四人寄集て行つた所が山本は云ふこと丈を言つた合ふ事のこと程の大事件に対命運動のあるとは沙汰の限りである。此の軍部が乱れて居るかの消息も窺はれる。彼等事件の張本が撤き散した宣伝中も軍部の腐敗を示して居る位である。（これは蔭の蔭の蔭の蔭）有かたがるけれども無いと危険なことは無い、偶りに一応行械を操

紙にまるこうがあの連中を養成してゐる大切りを煙
撃したとしたらんだんるこうまであつたらうか、無節制
の結果は決して地方すきを保し得るまでるい。兎
角今日のことい限る時かりて、実却がおり面白るを
こと軍部の大失態が伏して居ると思はれる、兎角
紙は自由の業を束縛されてゐるから、張膳
刷日七後の事を注意して見なければならぬ。
○長演劇論如何で道徳の紀念碑と為が
整理さるとアルバムを貼りこまれた書簡を一
見した、なが荒のうし折交つた文学界の人々から宮の
七比書簡を注意してこれら保存したものを大アル
バム十冊的り貼りとんだものである。

標原製

大谷川二葉亭
池部三山
響庵冨士村
高安孫雨
内田貢
田中智学
矢代八郎

北茅の内の二葉亭のが大きく大き三冊に充て
ゐる響庵のが二冊もあり、他の能家のを収めたよ
が二帖もあるる。他の委しく閲覧したいと思ひ
るが、が人の経歴をなるるうに真に得難い材料で
ある。北の整理の衛に市つたこのは生田七郎で、投

前の年月も時を経て年代順に採れもする。主
る山田清風がおれので、世中の一変から居の不幸の連
続の手紙はあんなんはあるもあらうと云ふと一紙を
いと云ふ、其の何かあると云くと、城内からの命で一
筆後生を引裂くことが例とうるもあり、一紙を有
まることを得ます。殊に家庭の事に関する手
紙の一説の上光を先生と云ふ即ちこれ
もあると語つたので、自分も始めて城内の内密
ことを知つた一驚を喫した。

廿日十吉記

○川柳は前述した日光細工「うり」と云ふのがあるこれの
家原の徒を称した句ひ「扇が日光」と云ふのが日光細工
を刺うも、寸秋の寧、「寸秋」日光絵の

複原製

お義父と云ふのである。柳井川柳が白沙事と世に
白沙、出た時北斗を初め守から川柳の
始り方を問はれるので、先づ「庭も桑もと後かん森
る」と云ふが前句で、其こに「扇」と云ふ
けるのだと云ふ。扇は日光細工の
の徒を称するの、なるもの思ひつき
る面白い一話とされた家
○大養木堂の長枝の書であつた。彼の学を語る初少の
時御家流を学ぶ、高山藩の右筆として也と、後の
為に大いに変じ、御家流の奥義を極めずと雖も
に未養あることを知るべし、晩年長鋒を用ひ、一風
ある者を作りしが、余の宮ろうの変化前の書を表

柳井

こゝに、余は例人中者に於て木堂を第一の推す、木堂翁も曰く君の為めに輝毫を揮ふと、而して校合を終る

（中略）

但此家義徂徠の巻あ後の巻の名を撰ぶ（四）文の横巻に長跋あり、こん余が行あて木堂に書かしめたものあらさんか、木堂の書と文とを見るべし、木堂は常に徂徠の也を賞して跋者の第一と為す、北跋文（略）徂徠の書を評（略）

（略）

（略）木堂没して亦者を作る由なし、こんあるは使俾と云へも可也

（略）

の大限老後の英後十年を紀念する四民敬慕今は既

（榛原製）

に畢つたが、残つたものは紀念事業の一である、建碑の事である。こんも漸やく字を刻り了つたので来る廿八日をトして除幕の式を挙げることゝなつた、北の日は克彦夫人の忌辰である。除幕式といふが、実は献呈式と云ふが妥当であらう。乃ち大隈家の允許を得て之れを其の墓域に建てることゝなつたが、正式の北碑を大隈家に献呈するのが除幕（略）廿八日の式であることゝ云ふ点もあらう。全体ちゝ生涯者を紀念する式を行ふべきであるが、再び多数を会することも煩はしいので、実行委員二十名が代表して当日式を行ふことゝなつた。自分は委員長であるから、当日碑の前に立つて献呈の挨拶をする筈である。碑は小

るものであるが、老炭の墓と共に長く伝いうべきは此
碑である。老炭が稚を養うて後も四氏が墨幕し
て措かざる状は後世をして感涙むせしめる大なる感動を
与え掬する、此碑文を読むに及び炭
慈き迹すべもあらう。これが此碑を建てた所以で炭
の事跡を考証した一書は後世見忘れられんかもしれん
るべから此碑こそ永久に存續するであらう。碑を
献呈するに方り一言注意を添ること、高知の人
諸式に碑を造るべきこと、就て、自分は本来なること
一案を得た、桐山均一氏に図り氏の考案が加いつ
て成つたものがこれで、意近にして見るべきものが墓と
形式を異にする為め碑の左右に突出の部分を小

横原制

材、蕃成花崗石　本磨き

碑全体の高さ　六尺五寸五分　最下部平敷七尺八寸に五尺

八寸の長方形　厚サ八寸　台石　四尺八寸に二尺

の長方形　高サ八寸五分　碑石中四尺厚サ一尺二寸

高サ五尺二寸

重量　約千五百貫

基礎　地下二尺掘り下げ　新案地形トシ　コンクリート

厚サ一尺二寸打ケ　えんこ一寸二分丸ノボールト二本

ヲ埋メ　コノボールハ台石ヲ貫キ碑石ニ達ス

石工　田口清吉

高橋伸光

るものであるが、老芙の墓と共に長く傳いるべきは此

つれこころい碑と其至石の合は七月に彫刻を施し
たことである。石材は伯耆前産の花崗石で高さ
惱　厚サ　である。撰文は松平康[illegible]氏
に嘱し限られた百字を以てした。書は現代の能筆
を物色することとせず、唐代能筆の遺跡を
就て集字の法を採用することとした。乃ち唐の集
聖殿大学士裴休の書した圭峰定慧禪師の傳法
碑の法帖が傳つて居るから、其中集字した
ものを撰択し、句勒し、在ちさる字は圭峰の他の字の
筆畫を湊合して成つた、此の集字を焼いた此の
ハ棒瀬阿氏で篆額も此人の揮毫である。此碑の
建設を終つまで約半歳始終相山村一氏が監督さん

君を愛する感謝する。今式場で大隈侯に此稿を献呈する願くは國民敬慕の微衷を諒とされん長く愛護されんことを冀ふ而して挨拶の概要を紹介せんとつこんなものであらうか

九月十八日記

○犬養首相殁後政局今日鈴木内相を女の後継者に挙げ後継内閣組織の大命は鈴木侯爵に降るものと期し、果して降れば軍閥内閣を組織すると期して居る様だが、軍部の志向を左の如くで頗る強硬の意向をもつてゐる。軍部の言ふ所は世間一般政党堕落腐敗を代表したものであり、ひとり軍部内の志向のみ止まらざるものである。過日の暴挙の如きも軍部の志向の現はれと云へるからうし、なほ軍部の偵察戦若くは研究

(水曜日)　報知新聞

黨略本位の内閣には陸軍入閣を拒絶

飽く迄擧國一致を要望

後継内閣に對する陸軍中央部の態度は建國本義の政治觀を大眼目とし、一貫せる信念の下にこの難局に處せんとして居る、即ち未曾有の不祥事件の眞因に對しては軍部固より峻烈の廓清を施すも、獨り軍部のみが徹底的究明手段をとるも國政を擔當する政黨自體において一單位政黨のみの單獨内閣では國難打開の道を開き得ない、非常時に處する道は國民的信頼を博し得る國家本位の擧國一致内閣でなければならぬとの强然なる意向を有し、若しこの非常時に處する信念を欠き從來の如き私利私欲の黨略本位の政治によつて内閣の組織せられるが如き場合には軍部としてはこれに參加する軍部大臣の入閣は拒絶せざるを得ないといふにある、しかもこの空氣は陸軍首脳部の一致せる輿論であるのみならず、陸軍全般を風びせる全面的意向であつて最早日本としては政權たらひ犯し的の黨略によつてこれ以上政界を汚濁されるに忍びず、明治大帝の政治觀法の眞精神に基づく政治上の實體が顯現せらるべき時代であると称して居る、即ちこの際鈴木内相に對してもその實質において政策を更新し政黨の立場を離れ擧國一致の實を擧げ得ればよし、それをなし得ざる以上は反對である、須く超黨派的人材にしてその傘下に總てを包含し得るものでなければならぬといふにある

（此の間の事情は責任秘書の表と不のめく桃義状である。）

義と見さべきかも知れぬ。知らず国公は出発を奏上を為して此の難局を救治するか、決定は四日公の東上を決するものである。就て見んと。

五月十八日

○義木十畝の画展陳書会に招うんとする一意閲覧した芸木の広い南洋の月と丸四の華麗の二点で共に四ヤムロ氏の三日時の宮生れである。但し会場に十畝と合しかし休題不に勢時、我が市の事を考へて見れば十畝の方が何時も日本に優れたものは無つて、もっと画家の参考となるものと云ふも山水ちゃ全盛無い山がありても水が無つて、みうるあつても樹が無つかりして凡山房がどころうう風景に無つて長ちゃ土地南四の枝○拙へ飯へ飯つ長ちゃ

（原刷）

ちゃ、茅生のことと無関係が甚だ遠い。そして稀なる真直のものが、ちょいこうと、建一楽の刀枕をうるへ。南四小建一楽の古来石生であるのへ此故であつて、流れる古代の建一楽は其の彫刻美の見るべきものがある。多くい宮殿と関係するものであるが、シヤム、シヤワ其他南四と仏教の今高盛んである。却つて印度の枝で仏教に裏へと見る日新もるへ、十方印度に渡つた時がこゝに分来捕さんと拙離の時であつたが、入秋方が飛ちゃいので捕つても入れ来が無いやうな仕来りとなつたので渡つた。南四義と術の内更仏のことをなくて見れば、あるゝ手数のかいるものである今の

めおく

雲坪傳正誤 其他

（一）

高津才次郎

信濃郷土叢書第二輯に「雲坪と井月」を私が書くことになつた。この二人を並べたのは、二人とも越後の人で、後半生を信州に送りそして一人は北信に一人は南信に不遇の一生を終り、死後にその人と藝術がもてはやされるといふやうに非常に類似の點を持つて居るからである。井月は雲坪より十年先に生れ雲坪は井月より十二年あとに歿した。

×

雲坪に關して私は無論詳しい事は調べて居なかつた。文獻としては市島春城氏の「藝苑一夕話」中の長井雲坪、それから後に復び書かれた「春城筆語」中の雲坪の事中央公論に出た村松梢風氏の「長井雲坪」と「雲坪遺墨集」位しか見てゐなかつた。それ以前に菊池渥堂氏や、奥田抱生氏や、鷹山秋軒氏等の書いたものが有るさうだが、それらを原にして書いたものに非常な誤傳が有ると分つては、もうそれも見る必要がなくなつたやうに思ふ。

×

今年の初め長野へ出て雲坪遺墨の大蒐集家宮澤長治氏を訪ねて特に逸品珍什を選んで見せて貰ひ、遺弟馬場磯松氏にも遇つて雲坪の日常を聞き、歸途松本で胡桃澤勘内氏等と會して雲坪の畫友藤森桂谷の逸話を得たりして歸つた。

×

それから間もなく、ゆくりなく眞にゆくりなく、雲坪の長子大助氏に幾度となく逢ふ機會が惠まれて、從來の雲坪傳が甚だしく誤つて居ることを知つた。私は今こゝに縷説するの暇を持たないので、斷片的に正誤と疑問を錄して置かうと思ふ。

×

一體雲坪といふ人は自己を語らなかつた人である。子息の大助氏等さへ殆どその經歷談は聞かされなかつたさうである。從來の雲坪傳には、だから隨分揣測や臆説が元になつて萬犬實を傳へて來たかの觀がある。

×

まづ第一に天保四年二月二日に生れたとの傳にも有るが、「雲坪遺墨集」卷頭の自像寫眞に雲坪自ら明治二十年に自分の年齡を五十六年と書いて居るからには天保三年生れでなければならぬ。隨つて享年は六十八である。

×

雲坪は豆腐屋の子となつて居るが父甚六はれッきとした醫者である。この事は春城筆語にも春城氏が雲坪の甥に當る長井鴻一氏の直話に據つて訂正してゐる。隨つて少時風景を寫生して居る間におつぼり出した賣物の豆腐を犬が嘗めたといふ話も、面白い爲に存しておくわけに行かぬ。

×

長崎へ向けて畫學修業に行く前父母既に歿して叔父の家に食客をして居たと傳へてゐるが、これも誤りで、當時父は存命し、長男の雲坪に家業を繼がしむべく醫學修業を命じたが雲坪はどうしても畫道に進みたいといふ。叔父の治郎七が父と激論して遂にその好む所に向はしめたのである。

×

こんなわけで雲坪は自分の知己であつた叔父さんに常に感銘してゐた。大助氏方に

通稱長井治郎七　萬延元年秋八月二十一日卒　慶應紀元秋八月應

雲坪契屬　長崎木下逸雲書

の箴幅がある。なつかしい恩人の叔父さんの靈を稽拜するの料として特に師逸雲に揮毫を乞うて表裝したものである。

標原製

雲坪傳正誤 其他

（2）

高津才次郎

春城筆語では最初は醫學修業の爲に長崎へ赴き醫師渡邊法藏號榮雲の家に身を寄せたが、雲坪の志はここに在らず、榮雲も亦共鳴して鐵翁に紹介したとなつて居る

×

所傳には雲坪が長崎へ赴く時は殆ど乞食旅行の態で、隣家のおきよ婆さんから與へられた、身延詣でをした時の白衣を着、團扇太鼓を叩きながらとあるが大助氏は否定してゐる。濱祖に佐渡の本間家の家臣斐田治郎右衛門を持ち、父は押しも押されもせぬ醫者であり母も北浦原郡太子堂の可なりな家の娘として見れば、やはり乞食旅行も否定する方が穩からしい。

×

初め號を師鐵翁から桂山とつけて貰つたが、同じ長崎に同名の按摩が居て、時々街頭で桂山さんと呼ぶのに氣を腐らし、師に改號を乞うたといふのもどうであらうか一方潔癖な雲坪ではあつたが、こんな事に拘泥するやうな人物とも思はれない。ともかく遺墨集を見るに明治元年から五年までには必ず桂山居士と署し、文字から見て明治二十年頃のにも桂山雲坪としてあるのを一葉見る（遺墨集六〇）

×

師逸雲は慶應二年八月江戸から長崎へ歸航の舟が行方不明になつて非業の最後を遂げた。病氣の爲師のお伴をせず、師の先途を見届けなかつたのを雲坪は終大の悔事として、師に殉ずるの心で翻來服藥しなかつたといふ事は、實に涙ぐましい美談であるが、この美談をさへ當の家人たる大助氏が否定して居るのを信ぜざるを得ない。雲坪は元來が藥ぎらひで、長崎で重病中も師が外國から渡來の博士の診療を乞はしめた時すら雲坪は肯んじなかつたといふ。その癖自分では腎藥を練つて施したり、本草の調劑法を人に傳へなどしたといふ。

×

雲坪の支那へ渡つたのは師逸雲歿後の慶應三年らしく、歸朝は明治元年の春である。

離亭柳色覺依々　一路青山映客衣　正是瓊江好風景　杏花時節送君歸

戊辰仲春奉送桂山居士雲坪先生歸鄉　江南蔣士寶

の幅が大助氏に在つて之を證する

雲坪は身體が弱くて、渡支後もしば〳〵宣教師フルベッキの厄介になつたやうである。しかし渡支する際、旅費がなくて、一時的基督教徒になつてフルベッキに連れて行つて貰つたといふのは誤りだと大助氏は語つた。十分の用意の下に國禁を犯して渡航したのである。

米國人　布爾幣幾蹙雲
明治三十一年三月十日死去
長井　雲坪謹

雲坪は斯ういふ風に恩義を受けた人の命日や戒名は必ず書いて昔を忘れなかつた人である。フルベッキの生國はオランダだが永く暮したのは米國である。

×

雲坪が長崎を立つて江戸に赴く途中病んで世話になつた遠州の宿屋の女中を義理と人情にからんで女房にし、後年入信後中野で死んだと傳へられてゐるが、二十二歳まで父と暮した大助氏が、たゞひ生前の事とはいへ少しもこの妻の事を知らなかつたといふのも不思議である。

雲坪傳正誤 其他

（3）

高津才次郎

遺墨集を見ると明治元年に龍城で（同書一六六）二年秋に安立精舍で、三年春二月に桐華書屋で、四年五月には甲州の谷村で（八四）五年四月には駿河の沼津で（一〇〇）明に畫を描いて居る。これだけ見ても明治元年後の移動經路が可なり複雜して居る。長崎から東京、東京から越後、それから入信するまでの間にまだ〳〵いろ〳〵の筋道があつたやうに思ふ。

×

龍城、桐華書屋、安立精舍は何處か知りたいものである。遺墨集には明治以前のもの、支那で書いたもの等は一つもない樣であるが果して遺つて居ないだらうか。

×

鄉里を出てしまつた消息について大助氏は斯う語る。

雲坪が醫國するや鄉里では長崎で修業した名醫が來たといつて病客が門前に市を爲した。所が醫者はしないで服裝は支那服であり、（長野へ來てからも着て居た）月琴といふ珍しいものが懸つて居る——この月琴は師逸雲が雲坪の病弱を憫んで保養慰安の爲に詩を書いて與へたものである。後に長野方面に月琴がはやつたのは雲坪の手ほどきに由來する——この物珍しい風俗にその筋の目が光つた。キリシタンの魔法を弘めるのではないかなど、疑はれたのに腑氣がさして、家を弟末太郎（前記鴻一氏父）に譲つて出た。これが恐らく出鄉の第一因であらうと。

×

山崎斌氏の「早春」中の雲坪傳に、雲坪の妻は尼さんであつた頭をそのまゝとあるが、この妻を世話したのは入信最初の門人であり恩人である飯山稱念寺の住職（法名曉樂院釋智賢、明治三十年八月十九日寂、壽八十五歳、長井雲坪謹識としてある）で、妻の父は飯山憲抱へ裁縫師士分の岩崎岩松で一面文化生活者であつた雲坪は、油でこて〳〵汚れる結髮を姉つて切髮にさせたのださうである。

×

子供の筒袖を長野に流行させたのが長崎將來の支那服をいつも着て居た文化人雲坪其人である。最初大助氏等兄弟が學校へ筒袖で通つたのを先生は異風として喜ばなかつたが、雲坪は承知しないで、いやがる子供に押し通させた。そしてとう〳〵それが女子供にまで流行の端となつた。「早春」に子供は碌に學校へも行かず下駄も滿足にはけなかつたとあるのも謬言である。

×

雲坪は貧しくは暮したが、清貧の字がそのまゝ精神的と共に物質的にもであつた。たゞひ粗服でも必ずさつぱりとしたものを着、襟卷も、だから白を選んだ程だ。下駄や杖や足袋に少し泥がついても小言をいつた程だ。果物なども決して皮を取らずには子供に食べさせなかつた。

×

「早春」に雲坪の繪が好まれなかつたのは水墨の繪ばかりで——繪の具料さへない窮迫のため——ある爲とある。無論蓋然的に言はれたのでもなからうが、うつかり讀むとさう取れる。しかし遺墨集を通覽すると取材の方針にも依るであらうが揮毫年月のはつきりしてゐる百二十點中の五十八が水墨又は米法で、他は着色、淡彩、青綠、金碧である。畫道に精進した人が、窮迫の爲に繪の具すら持たないやうに考へるの非はこれで直に是正されるであらう。

雲坪傳正誤

（4）

其他

高津才次郎

窮迫のドン底に在つたやうに傳へる爲に――それが雲坪をより光らせて居るのではあるが――葬式すら出す事が出來ずに暮夜ひそかに墓地に運んだやうになつてゐるが、事實は大に異なり、その日即ち明治三十二年六月の二十九日は梅雨あがりの夕立の爲に玉蘭堂内で取りおきをしたが、花などもあつて、もし天氣がよかつたら無立派な葬儀だらうといはれた程ださうだ。尤も雲坪は人に厄介をかけるのを好まず、殊に不規律な「葬式時間」については平生から一家の改良意見を有し、親近のもゝ外計を知らせぬやうに遺言をしたさうだが、大助氏の奉職した裁判所關係の人々その他の會葬者が相當にあつたのである。

×

戸隱に上つたのは明治十二年で、遺墨集に依るとその七月から瑞岩、藏月仙窟の號を用ひ（一五四、一六四）十四年に藏月仙館に改めてある。（五一）雲坪の署名の同書中初めて見えて居るのは明治七年小チ谷で書いたものからである。鄉里を去つて信州に入る途中であらうか。（尤もその前桂山居士吳江と署名したものにも印章は「雲坪」「元書畫印」が押してある）

×

尙遺墨集に據つて落寂の變遷を記せば、「瑞石」は十二年から十八年即ち戸隱下山後數年尙之を用ひ、「藏月樓」は十六年夏から十七年二月まで、「玉蘭堂」は十八年春から「蘭華山人鑿々子雲坪」は二十八年五月以後にである。

×

長子大助氏の生れたのは明治十一年で飛騨の高山醬油屋三木長右衛門の別莊であつて、戸隱で生れたのは次男三次氏である。戸隱から下山したのは十七年でなく十六年の夏か、十一月中旬らしい。（遺墨集四九、一八九書簡）

×

下山後三ケ月妻科に借家し、それから城山の今の三幸座の在る所に門人が家を建て、公園の櫻がさしかざして風流な住居であつたがだん〳〵喧しくなつて阿彌陀堂の東即ち今忠靈殿の在る所に新築して移つた。その當時草茫々と生ひ茂つて、屋根が僅に見えた位であつたといふ。こゝが所謂玉蘭堂でその前の家が藏月樓である。

×

この玉蘭堂を取拂ふ際宮澤氏等の靈力によつて林檎結ぶ市外和合の地にそのまゝ移して永くその居をしのぶ事が出來るやうになつたのは嬉しいことである。この居を移す爲に關係者の財を多く投じた事は無論であるが、家其の物は「相當以上の價格で遺族から讓り受けた」ものでないことを辯じて置く

×

逸話の中に或詩人が雲坪を讀して「畫風學大雅、人物復相似」と書いて來たのを、雲坪は癇にさへて忽ち之をビリ〳〵と引き裂いたやうに村松氏の書人傳に載つてゐるが、大助氏所藏品中に山田新川が贈雲坪畫傳士と題する古詩長篇が贈雲坪畫傳士と題する古詩長篇が末尾に「畫風寡九震、人物亦相似」がそのまゝ破れずに殘つて居る。孰れが是、孰れが非？

雲坪傳正誤

（5）

其他

高津才次郎

畫人傳によると三輪村相之木の雨宮傳吉と稱する製蠟業者の爲に茶筒一本三厘の内職で生活費にしたさうあり某氏の談では一錢五厘でしかも雲坪のでは賣れず却つて某弟子の書いたものなら賣れたといふが大助氏によれば記憶に十五個書いて與へたもので内職になぞしたものでないといふ。

×

その外ちよい〳〵した事に誤正すべきものも有るが要するに雲坪を或は面白く或は高邁に傳へんとして可なり事實を粧げて居るやうである。物語としては面白いかも知れぬが、あまりに偶像化して眞を失ふは却て彼の爲に取らぬ。

×

少くとも以上の正誤だけで、從來の雲坪傳の遂與とする所が大分減殺されることになるが、しかし新に誠の人、愛の人、正義の人、涙の人雲坪を私は眞實傳によつて加へ得る事を喜ぶ。一二の例を擧げやう。

×

鐵翁といふ人は奉行位が尋ねて來たからとて、直ぐ逢ふやうな人ではなかつた。氣性峻嚴で、弟子を取るにも水火を辭せずといふのでなければ許さなかつた。夜は三四時間しか眠らず、そしてそつと早曉に起きて勤行をする。弟子はその前に起きて洗食の用意をせねばならぬ。夜は遲く朝は早く、到底俗物には勤まらなかつたさうだが、雲坪は忠實に奉仕した――これが體を弱めた所以かといふ――鐵翁が三尺ゆたかの白髯をしごいて落ちたのをちやんと拾つて大事に紙に入れて置いたのが今尙有る。斯ういふ風だから雲坪は特に師翁に子愛された。逸雲にも同樣であつた。遺墨集寫眞の被布、前記の月琴、或は草鞋の紐を通すべく器用にこしらへた道具など逸雲遺愛の品が今尙保存されて師弟のこまやかな情誼を語る。

×

鐵翁大和尙、逸雲大居士の自像と命日を「焚香沐浴一筆三禮」の筆で拜寫したものを始め、到る處の恩人や友人の位牌の數十枚を佛壇や壁に貼つて冥福を祈つたものが、現に表裝されてゐるが、彼は硯蓋にさへ戒名命日を書いて、日々之を目にして命日を忘れぬだけでも供養になるとした程の人である。

×

その中には承應二年八月四日付で「道滿院源風道閑居士」外家族五人の俗名と法名を錄した後に「佐倉宗吾樣戒名、必ず可祭」とあるのや「鳩精靈、明治二十三年七月二十一日」と書いたものなどが殊に目を惹く。

×

鳩精靈――それは暑中休暇の或一日一羽の鳩が玉蘭堂の垣の内に入り、やがて緣に上つて來た、雲坪が手を出しても逃げない。何か救ひを求めるもゝ樣である。見れば子供の惡戲か、嘴にモチが付いて居る。雲坪はやをら湯でぬらして拭つてやつた。鳩は羽ばたきしながら半日ばかり家の中に居た。疊の上に米などこぼして與へると喜んで食べたが、やがて倒れた。絕食した所へ急に食べさせて惡かつたかと心配してゐる内、益々苦しみ出したので布團の上に置きフランネルを着せたり水をやつたりしたがとう〳〵その日の五時頃目を落してしまつた。そこで「鳩靈」と書き、横澤町粟畑の庵主を招いて讀經をしてから大助氏に善光寺裏の大欅の根元へ埋葬させた。命日にはその庵主を招いて經を讀ませ子供等を呼んで茶話會をした。

雲坪傳正誤 其他

（6）

高津才次郎

病める鳩が選びに選んで玉圃堂に入つたのはそも〳〵譯が有る。その頃善光寺の麓下に飢と病に呻吟してゐる乞食の所へ雲坪はいつも藥と食べ物を自ら運んだ。巡査が追立てに來ると「九死一生の人をみだりに追ふとはけしからぬ。其の筋はかゝる人をこそ助くべきだ」といつてよく巡査を這々の體たらしめた愛と涙の人雲坪であつたからだ、と私は言ひたい。

×

子供には座布團を敷かせず、炬燵で勉强を許さぬといふ嚴格な父であつたが、今の千鳥が池で子供が水浴びするのを查公が咎めかけると、彼は又々海岡の子に泳ぎは必要であると子供の肩を持つて「君ではわからぬ署長をよこせ」いつた話はまだいろ〳〵有るが一二の例に止めて置く。

×

要するに私の新に知り得た雲坪は、傳の如く窮迫のドン底にあえいで居た雲坪でなく、貧しくは持ちつゝ而も靈道書道そのものは蒼古高邁に飽くまで丹念精進して苟もしなかつた雲坪である。麗逸警拔の雲坪よりも更に醇厚忠誠の雲坪である。奇人よりは正人、孤落不羈であるよりは潔癖嚴格の雲坪である。晩年一杯機嫌の時彼はいつも「おれ位人の情によつて生れて來たものはない。おれは本當は仕合せ者だ」と言つて居たさうだ。私はこの言葉をアイ■ニイだとは思はない。

井月全集

本紙に連載した昭和元年末の「乞食井月」、三年五月の「井月雜記」で彼の風格と私の小さい業蹟は讀者諸君の御領會を得た事と思ふ。その夏北信千曲沿岸の足跡をたどつて一先づ整理をなし、更にその後に得た約百句を加へて、下島氏の「井月の句集」を增訂し今年九月初秋の風と共に下島氏と共編井月全集の名で東京白帝書房から世に送られることになつた。

×

發句千數百、連句三十餘卷、書簡三十通、日記、雜文等ともかく私たちの手で收め得られただけの遺稿全部に、遺墨寫眞、略傳、逸話、考證等約五百貝の貝込。實は井月の知られて居る範圍が限られて居る爲に、容易に發行者を求め得られなかつたが、丈草句集を出したこの新しい發行者が井月に興味を持つて利益を考へないで出して呉れることになつたのである。

×

編者としては發行者に損をかけては濟まないのでせめて三百位は私の手で讀書を得ようと祈つて井月に緣の有る人や知己に依頼狀を發した所、幸にも既に四百の申込を得た。定價貳圓五十錢豫約申込者には貳圓といふ事になつて居るから本紙の讀者に、同じ求めて頂けるなら、さうなされたいと思つて本紙を拜借してお知らせする。別に期限はないが遲くも本月中に小生まで。

×

特にお願ひしたいのは、この全集が全集の名に少しなりとも選ざからないやうに、藏の隅箱の底から井月の遺墨を新に發見された方はどうかお知らせを願ひたいことである。井月のやうに行きあたりばつたりに書いた人のものを完全に集めることは絶對不可能であるが出來得る限り之に近づけたい念願を諒とされたい。

○昨日上野公園内を散策中一日と解んだのい労働者達きの男女が公園を掃除してゐる光景であつた。我々は

を移して公園の奥へ進めば進むほど多くの男女が掃除

こゝあるゝ、どの道をまかつても此等の男女が居る、恐らく生

動の男女い千以上を數へるであらう。男女の服装い一

定して居らぬが、襟をかけも藍縞麦稈帽を載せ

ゐる、男子の服の襟をそなまと天地教の深ぬきの文

字があるのい、ときの天地教と奉仕する連中であると

氣がつき、更らに社会奉仕の為めの出動であると聞

いた。恰来多数流と就て見ると、北の天地教の奉

仕デーい一為の信徒が千八分をして各公園の掃除

をなすと云ふ記事があつたのい上野で目睹したの

○其の一隊も参ることが分つた。自分の天理教を始まるいかに斯る奉仕的行動を信徒に行のしあることは誠に頼もしい。斯ることが沢山数の宣伝になるかも知れぬ人が社会奉仕と相違ふて、世間に浮く奉仕とかサービスなどと云ふ語を用ひてあるが事実奉仕と値することが多い今日、此の一団人の行動に賞する所多い。今日木の葉の舞ふ日で、どの公園も落葉に満ちてゐる。此時を選んで掃除をすることは公園浄化の為めに多いに叫つてよいと思ふ。有難い貨物とりの人夫さえ多くの事を為さしめたら、随分貨物は巨額に上ることであらうし、元理教信者の此奉仕の市の清掃からも多とせねばならぬ

五月十九日

○昨日の午後首相官邸で未曾有の首相の告別式があるので見物に出掛けた。官邸附近は自動車が何十台も並んでゐるあるまで自分も自動車で徒行したが恰度八到底元出し難いと諦めて、官邸前で降りた。さて門内の弔場に死者が受付まで行くと四人立の列が大通過とした受付まで行くと四人立の列が大通過のが、前頃は何をやつてゐるのか、歩武を移すことが出来ないほど約三十分も要した。新聞紙上に告別は無つた、棺とあつたが、こんなに時間の費えた告別は無つた、棺は大ホールの正面に置かれてあつた。首相の葬儀を行ふまで減ぶ哀しい事と思つたが、此家はマサカ斯る不幸を予期して心つけてゐたもあるまい併し

貧木堂がその遺骸を断る壮大の室を置かせしのは彼んの一代を飾るものと云ふべきであらう。自分は奏楽動の列に在つて、木堂を追懐した。木堂は自分らも四年もし此先輩である。曾つて木村梁の門下生であつたことを聞いた。彼の漢学素養のあるのは梁のお蔭であらう。木堂は号堂と称し、其の性格は豪放磊落に富む、号堂は猟奇を理想家であるが、木堂は海城庶務的の人である。彼が反骨堂の改名を投じたのも其の経歴と共に昔お坊ちゃんの性格を出さしめた。人間は長寿を保つべきものだと、自分は木堂を就て之れを云ふ、彼が五十年の政治生活の終に臨べらのは、一は長寿のお蔭である。犬養の風貌は

樣原製

の親分らしくであるが、あんで妻の愛嬌があり人情味がある。文が人を云はしむると犬養は胸中一何を秘しんるかを知らんと思ふ。その異彩はアンナ透明の人のようと評したことある。実は此評が当つてゐる。あり人は他人の真似難い工夫があつて交いさと面白い人であるが、喜怒を偏狭で人を容れない偏を完璧の若い時は度々木堂の家を訪ん饗宴を受けたことがある。その頃は未だ早稲田に移らない前で、少なくも狭い家であつたが、刀剣を玩味とする木堂は多く刀剣の附属品を蒐集してゐた。そんを示されて説明をやつたことも度々ある。自分が高田氏を在社の時、数件の被告事件が起つた時、自分に代はる主筆を選んで異のれ

人に木堂である。その人は殷賑時中と云ふ秋田出身で日活有
の学校で佛人アツペルさんなどいふ。此人さ刀剣の鑑賞
力があつたことを思ふと、木堂と趣味の友であつたと思
ふる。木堂は書と趣味があつて、自分が一時名家の書画
を蒐集した時は、態々一箇を自分で宅の四谷天竹
の一小庵に多くの名家書画があることを報じて
たことがある。その庵といふのが今主流さうて居る平山亜
水。木堂が早稲田の杉本順の斎邸を移つてからも
訪問した。客室には木堂不折庵の主流な幅が掛けも
あつた、木堂は酒飲さんは阪本金弥の好みと許
つた。その頃初めて電燈を燈じた、木堂の云
ふ通り此時四畳客が来たから、自分のスウヰッチを

榛原製

押くさうとしたんは若葉がいい吹いても消へるのが俺の
吹けば消へると云ふも大ウヰッチを拵ぢつて吹くま
ねをしても消したのを四畳とまあと云ふたとも木
堂一流の歓言を思ひ出す、尾崎の雅號がもと琴
石と云ふのを楽廉の名のやうだと曰つて、後藤
新平の例を郷入りれと曰つた、君曰い木堂の
得意とする所であつたが、何うも愛嬌があつた。篆
刻家渡辺花氏も自分が活版時大隈老侯の印も
彫りあげたのを誰れの依頼かと少人から木堂の依
頼だとかつたので、後日木堂さ会ふ事を話すと、木堂
の談話がおもしろい。実は二個の印の一つは代筆の二
字を誰れも頼めない大篆で彫つてくれと頼んで

が花いは目座じきうにとゝかれが、こんちゝは出無目で
ある。保ー大隈侯の書とちつてゐるもの内に木堂の
代筆はいくらかあるの相違ちい。木堂云く、大隈侯の
代書の皆初重要川田ちゝがやつたこと文章も立派に
心追を下つて点睛や自分が代筆することもあつた、
若し推敲次かくの多くの序跋を時々してゐたら
大隈さんは二ヲクろうろう隠つて文章は出来と思ひ
例の下手さうなものとなると人は評するも相違ちいと笑
つた。あの人の話しは一人を千ヤームする好きである。
ある人は刀剣の鑑定に天狗であつた外に碁石の鑑定
も得意であつた。碁も好きであつたが、碁盤の産
品を得るのに常に涙をしたつたいつもや大阪の花

横原製

形彫の日本一に時々産盤が手に入つたとこぶを
自分に誇示された、自分は碁の解しちいが碁盤の業
慕はとある程、木堂が相當骨董に理解のあるこ
とを知つた。大隈侯十年の政変今を先に偽造あり是
能面白とと思つたが、利頭投合が無く、今の前日大隈公
彼で金ーが最後であつた、こんなことをえうらえん
と思ひ出し、雲翁に焼香をしても仏金もいろ〳〵遺族
しに仏が遂に考ひ出ことの大碁もあり玄関の金のせい不幸
る最後を家はけに実は大碁にて政堂生活を終始
しにものはなく。曾うに言政の神ちゝ云いんに仏が
政堂を混濁に導いにやまま沼中にのも亦大碁
等である。政堂の和代田を未しにちん大碁の文明責
任ひちのはけんにて、政堂政治家の代表ちゝは大碁
は高の部碁であるから、政堂排撃の毒手の
犠牲とちつにる日偶仏ちゝにちゝも考へた。
（十月十九日記）

が蕪山いは自ら応じきれぬと云ふのが、これらでは出鱈目で
ある。併し大隈侯の書とあつてゐるもの、内に木堂の
代筆はいくらもあるに相違ない。木堂云く、大隈侯の
代書は当初重野川田などがやつたが、文章も立派
が追々下つて矢野や自分が代筆することゝなつた、
若し維新以前からの多くの序跋を除外して見たなら
大隈さんはエラクもあるが随つて文章は表と見比
例の下手なるのであると人は評するが相違ないと笑
つた。あの人の話しは至極人をチヤームする妙味がある。
あの人は刀剣の鑑定などは天狗であつた外に硯石の鑑定
も得意であつた。碁も好きであつたが、碁盤の佳
品を得るのは常に汲々としてゐた。いつでや大阪の花

（大正十年の[illegible]）

[illegible]

○、犬養歿後の政局は日一日混沌が深厚で、西園寺元老は漸やく
生て来ても、困惑未だ決する所なき状態である。憲政の立前
道からすれば多数を擁しておる政友会の総裁に大命
が下るべきで、政友会は之を期待しておるのであるが、事情

ハ、そうそう簡単に行かぬ、いつも他の重臣に向ることもあるべく、後継者を奏薦する元老たちハ慎重に各方面の意見を徴してゐる。政党政治の弊を呼ぶことのないひとり軍部のみならず枢密院政党内閣大臣も皆軍部の共鳴の進言をなしてゐる、山本内閣のみなら重臣も亦同様である。後者ハ憲法政治を非とするといふのが、非

常時ハ非常時相応の内閣を要すること云ふまでもなく、或ハ大政党の聯立内閣を主張し、多数政党基礎の上に政党以外の人物を首班とすべしと唱へ、亦ハ政党全体ハ他党との聯合を非とし、飽迄自党一黙殺で行かんとする。軍部の強硬意見と異なる。

てハ荒木陸相を代へても妥協を試みたが、軍部ハ政党全体の撤廃を要求する位間の侯爵顔触ハ満足せず、形勢の険悪きまん元老も困惑したもの、模様を伺ふ。政党ハ未だ位置の首班を奏薦すべきハ、政友会内閣で政党浄化が行はれようとの思ひ切つて行かんとの思ひ、政友会を除外すると

そうという政友会の反噬を考へ合はせ、元老の苦衷は
真に察するに餘りあり、偶々新聞紙に元老壮時の写
真が出て来たが、両国寺侯が四十一歳、戊辰の歳戦後、来訪の時が十九歳、北方係は世
の面影も隠蔽出来ぬ程大に、維新の国難
の難局と戦ひ、果して如何なる新生命とするか、立

月廿一日　朝記

○四民教慕会の特業はまづ「こころいか」、大略左の
如くである。此会の事業として祭典を行ふこと紀念
碑を建てること、紀念冊子出版の事、記念碑、七萬
円許の費用がいるの計画である。

榛原製

とゝして公表する中国人から中国人へ云ふことを以て
ハ寄附金を取ることハ時の郎柄氣受けもよしく、
事務も長くあるから、義捐人の募集と
その集金と合力を書し、続果相当事務費
にかゝつたが、後日収支償はれて差千円金を生す
るの到つたのハ成功と云へべき也　　十月廿一日の記

○新潟の村松清雅氏と江馬細香の書簡一
通を昨夕来る、此者簡の筆末数之見びある
から、聊か面白しと感する。数之と細香ハ
どんな関係があつたか、後復した所と、手紙を
見ないから言ふに思つた此が、読んでみれば、数之
が名家用書書を集めるのが、手を細香

まだ過いしたことが知れる。他の書類を得る
ならば牧之自身の書を焼棄て、細香も自業
を宮せしことが書かれもするのに、細香の書物が
牧之方へ残しもあるる譯が分つもしれぬが
一向つまらぬ。細香の業績は五十嵐任の時
のものが書中にある光蔵閑蔵の事が書こうと。
北佃雪渓のものも蒐集が及んでゐる。細香の手紙
が牧之方へあるのは当然のことである　十月廿二日記

榛原製

故大隈侯國民敬慕會收支計算報告書案（五月廿日調）

收入

金九千〇參拾円也	賛助金	
金六百弐拾円也	献花料	
金六百円也	賛助金未收入分	
金拾參円四拾弐也	利子	
計金壱萬弐百六拾參円四拾弐也	其他	

支出

金弐千參百拾五円八拾弐銭也	祭典及集會費
金七拾円也	供物費
金參千八百六拾六円〇八銭也	記念出版費
金壱千七百參七円八拾弐銭	記念碑費
金參百八拾八円拾七銭也	會員名簿並報告書費
金參百拾四円五拾四銭也	發起人賛成人勧誘費
金四百參拾七円〇弐銭也	廣告費
金七拾七円四拾七銭也	集金費
金七百參拾円也	事務費
金弐百〇弐円拾七銭也	雑費
計金壱萬〇百參拾九円〇九銭也	

故大隈侯國民敬慕会收支計算報告案説明（五月廿日調）

收入

一金九十三拾四円也　　献花
一金六百弐拾四円也　　賛助金
一金六百四円也　　賛助金未収入分
一金拾参円四拾弐也　　利子
計金壱萬弐百六拾参円四拾弐也　　其他

支出

一金弐千参百拾五円八拾弐銭也　　発起人賛成会及委員会費
内譯　金壱千弐拾四円弐拾九銭　　式場装飾献花用花代印刷物其他
金八百四拾九円九拾八銭　　ラヂオ ニ関スル費用
金九拾円　　案内状ニ関スル費用
金六拾弐円弐拾銭　　活動写真ニ関スル費用
金参拾五円　　諸雑費
金弐拾八円九拾五銭　　車代
金弐百弐拾五円四拾銭　　借紋料
一金七拾円也　　其他
一金参千八百六拾六円〇八銭也　　大隈家祭典供物費
内訳　金壱千六百五拾円　　記念出版物費用
金壱千五百四拾八円八拾弐銭　　編輯料
金五百五拾四円弐拾銭　　印刷代
金百拾参円〇六銭　　其他
　　紙代
　　本代
　　布代
　　送費

一金壱千七百参拾七円八拾弐銭
内訳　金壱千弐百拾弐円八拾弐銭
金弐百拾五円　　記念碑ニ関スル費用
金参百円　　石屋
金拾円　　謝礼
一参百八拾八円拾七銭也　　建碑式招待
内訳　金八拾七円六拾八銭　　絵はがき、慰労金ホ
金参百四拾九銭　　雑用
一金参百拾四円五拾四銭也　　会員名簿並ニ報告書費
内譯　金弐拾参円五拾銭　　名簿印刷及発送費
金弐百九拾壱円〇四銭　　報告書印刷及発送費
一金四百参拾七円〇弐銭也　　会員勧誘費
内譯　金弐百八拾七〇四銭　　原簿調製費用
金百四拾九円九拾八銭　　勧誘用印刷物及郵便料
一金七拾七円四拾七銭也　　広告費用
一金七百参拾円也　　新聞広告費
内譯　金参百八拾円　　新聞記者招待費
金参百五拾円　　集金費（秋季祭用費ホか）
一金弐百〇弐円拾七銭　　事務費
計金壱萬百参拾九円〇九銭也　　手当及給料
差引残金百弐拾四円参拾壱銭也　　事務所諸費用、電話料、消耗品代ホ
雑費（諸車代、郵便料、赤旗代ホ）

尚は残金處分方に付ては未收入金全部徴收済ノ上改めて相談する
ことゝし夫れ迄実行委員長に保管方を一任することゝ、

○此夜政府要人、時代の舊友十人、田下文次（元代議士）方に会す、皆七十内外の元人也、会するや「政局
救時代の舊夢談」を各々披つ、席上、神意
の強き事と、敵き時の即極政局に関する談
出で、余大非興（と論議す、大非の事業の日
大養首相暗殺者が撒布し居る全文の写を
（参考）示す、之れ一種の「怪文書」と称せんか
全文は秘さんものあり、即ち左に収めおく

日本國民に檄す！

日本國民よ！！

刻下の祖國日本を直視せよ

政治、外交、経済、教育、思想、軍事……何処に皇國日本の姿ありや

政權党利に盲ひたる政党と之に結托して民衆の膏血を搾る

財閥と更に之を擁護して壓制日に長ずる官憲と軟弱外交と

墮落せる教育と腐敗せる軍部と悪化せる思想と塗炭に苦

しむ農民、勞働者階級と而して群據する口舌の徒と……

日本は今や斯くの如き錯綜せる墮落の淵に、既に死なんと

してゐる

革新の時機！！今にして立たずんば日本は亡滅せんのみ。

國民諸君よ

武器を執つて立て！！今や邦家救済の道は唯一の「直接行動」

以外の何物もない

國民よ！！

天皇の御名に於て君側の奸を屠れ！！

國民の敵たる既成政党と財閥を殺せ！！

横暴極まる官憲を膺懲せよ！。
奸賊、特権階級を抹殺せよ！。
農民よ、勞働者よ、全國民よ……
祖國日本を守れ
而して……
陛下聖明の下、建國の精神に帰り國民自治の大精神に徹して
人材を登用し、朗らかな維新日本を建設せよ
民衆よ！。
この建設を念願一つ、先づ破壊だ！。
偉大なる建設の前には徹底的な破壊を要す
吾等は日本の現状を思して赤手、世に遍けて諸君と共に昭和維
新の炬火を点せんとするもの
素より現存する左傾右傾何れの團体にも属せぬ
日本の興亡は吾等(國民前衛隊)決行の成否に非ずして吾等の
精神を持して續起する國民諸君の實行力如何に懸る
起て！。
起つて眞の日本を建設せよ！。

昭和七年五月十五日

陸海軍青年將校
農民同志

南日本会右高崎山也森四郎右衛門橋本一郎
真崎無義、南義郎、名川軍二郎、米田
安平、木崎孝義、田下文次郎、安藤孝
川又八方、桜井庸介、名川八十一四郎と
ふが選錄ず

二月二十二日記

○彦島で名家の妻)里を印行の挙をす山崎楠
長義、金の義を撮影することを富む
即ち他に得難からざる山代名士の出崎
を出して撮影すること、其日左の如し

桜姫先
武田耕雲斎先武田
鎧を献上ミつき西家の刀

を西園寺公と書いたる和歌
なり

木戸孝允　佛蘭西マルセーユ旅館にて
らち木内藏と共に作りたる
詩中の長句なり　用紙
旅館マークの入りたるを用ひ

閑叟宋書　春嶽

三公の書簡を合裝一帖
となす、春嶽公の書狀
その二通二公を懷ふの
文言あり

西鄕隆盛

岩倉具視　麥亞諫議

大久保利通

三條　公

重要國務に就き流涕
云々と有り伊韓の紛糾
の際の書簡なり

桂　公

田中光顯伯爵長文
なりしと論じ軟論を駁し
あり、西鄕一時の態度を
ゆべし

伊韓論難論に京すること
書岩倉公宛

犬養木堂

重要國務に就き流涕
云々と有り伊韓の紛糾
の際の書簡なり

田中光顯伯爵長文

從徠書卷漢文跋

加藤春路

大谷光瑞

文

かゝる内伯爵大谷光瑞氏と大隈侯爵

大隈侯光瑞氏の頼数を訪ふの

○京都の有名な寺の庭園は砂を盛る高低が多く用ひられるが大徳寺の庭も一面の砂が平らに盛つてあつて隅々まで行渡つてゐる、金閣寺の庭も砂が方形巻くの円形に盛り上げられ、その立形や螺旋形の線が高の龍の昇り龍を画いてゐるが如く龍安寺の庭も一面砂で、かるる巻石が點々として樹木い更

模原製

閑庭　月光　光瑞寺　白井石泉

比興い、新しい作庭の高低は何から来たのであらうか、仏教の図像ある西域の沙漠地であるから、まんこ形西洋のかと云ふ説もあるが、どうであらうか、自分の否定する説も有ればが一概に肯定もし難い。実の一面の平沙の海を口形容すると解さんとの説もあるから此の海を)の庭とする平沙を意匠とした例も有

るが、こんゝ一向風服が云来ぬ。海岸さゝ有御ん た景色
であるから、況し京都のめいさ山地と海を形成る意
匠に決して平凡でいえない。北同うある龍安寺ゝ門
前樂々ゝ森森がありて、樹の風趣ハ豊かであるか
ら、庭と樹木を目あしらうのを重複 [illegible] とし
特と避けて一切樹木を排し作庭式を取つかとして
考へても甚だ意義があるやうに見へる。大徳寺の庭と
しても四角い樹木と満てみるから、寧ろ光を避け
たのが、作庭家の苦心の存する所とも思へる。大徳寺
の庭の一方まゝ、霞山が近かく見えて森林そのの風趣
もおもしろいので、光を見る為め、わざと庭の一方に
矮樹をちらしばかりあしらへて、自然の山色を庭景

標原製

と云ふ。そこで作庭の工風の如何がある。そこで作庭の工風の如何がある。後世の作庭ハ纖巧と流れて、コマ〳〵し細工が無
んゝ、谷風と思いきゝけんども、大きい岩り方まゝ流れ
極大の趣がある。或ハ庭に砂を盛るのハ月光を受
ける用意だと云ふ説もある。金閣寺の盛砂ちゃ
と銀沙灘などの名あるのも月光を受ける為の用と
も思いんが、盛砂を海と見せ月光の映まる景趣
を意意とするのハ高雅であり、凡人の及ハぬ雅び
作庭であると思ふ

○事変以来一週年を経て、やつと後継内閣首班の奏薦
となり、愛と矛奇高揚実に組閣の大命が降つた。高
橋子の如き内閣を組織するハ、まゝ分らるへが、一般

の要望に強力内閣であると共に、政黨を無視することも出来ないから、政黨の支持を得る内閣であることは言はずもがなである。閣員に政黨より採るの外他ならぬ政策を採ることは但閣の方針である。故に此の内閣は一種変体の内閣、所謂超然内閣である。綜合内閣とも云ふべきものであらう。協力内閣は曩に若槻内閣の末路に、宜達内閣と合てられて失敗を帰したが、協力内閣を必要とする機運は既に萌してゐたのである。今日を待ず既に協力内閣が政黨者流に依つて叫ばれた譯だから、政黨の無氣力は既に暴露されてゐる。主意貫徹下に多数を渇望する有様の政黨の首領と組閣の大命が下らす、斯る変体の事の現はれたのは、政黨自から招くものと云はざるを得ない。政黨の信望の地に陥ち一證であらう。而して此の両事元老が各方面の意見を徴し、誰れの言ふのも一黨内閣を採るとする在つた。此の変体内閣を見るのも偶然でもない。斯る内閣は機運と投するものかも知れぬが、果して一般の要望を満し得るや否やは頗る疑はしい。人材内閣、綜合内閣等名は美であるが、それ程統制の困難な内閣は云はのである。単独一黨の内閣ならば、何等為すことが無い。難解内閣で果して事が挙るであらうか、船頭多ければ船は山に上る。言葉は悪いが福引のよい公正の人であるけれども、過去等に未だ斯人の統制技倆を知

らるゝ。此度政友と会し北郎と斯う仲間の改悟を収めるまい特る大詔の煥発を奉するとゝ説も出た。併し大詔の煥発を待つまでもなく、四囲の事情を考へんば、協力内閣いまゝ文字通り、私を棄て至誠以つて事に當ら様ばならぬ。此の精神が無んば皆内閣人材を集めても何等為すことの無いのは勿論切つて捨てゝ外すもの国難があり、内うては民衆は紙政を注ぐ居る。此情今尚ほ醒もることなくんば、国家の運命はいかゝべきの文。此の組閣の次第は完から大詔の煥発を常に見るべきものである。決して元老一個の私見で此の内閣首班を奏薦したのでなくして元老が数日各方面の意見を徴したのである。

此の想像し得ることである。蓋くは此内閣に幸あらせたい

五月廿三の記

○秋月種樹は維新の人物で来泊したことがあるので縁因がある。其論と揮毫に出でた書幅や家祖の蓄志花もあるが、晩年の書は一幅も無い。偶ま今日坊間に一幅の書を得た。尺寸角の小軸に山を画いてあるこゝ、賛詩もあるこゝ、賛詩の風格がある

風勁山欲寸材生千尋卿仁萬岩聳
何人倩扶登攀乎神氣森然険か
雲間の史

横原製

○予が小西架中に臺湾土人の玩具一二を得たり皆
玉土偶也偶ゝ山中樵夫二基の玩具を得たり
七寸ばかりの一小婦人と覓し一小兒と覓し是雅
かく一小婦人と覓しくあり手乳を藉ふしてあり谷有
七寸許彫刻既に粗略に塗りあり こん
こを土人の作と看取るべく其の手法の拙稚なる不
味なり 蛮名ウラウル山林麓の紫品 就て本生
の初めて掘出せしか 竹又白色大理石紫の
猫を得たり。猫が口を開いて欠伸の状 滑稽
也 偶ゝ又舎田市原ゝ家ゝ自作の鳳凰の彫
物を見るに形容古雅洋折衷なるべく
変ゝ ウフの味を存して既を見る 廿四日

複原製

○革命の時、高ごとのおこりて十日を経すまき
北内閣の組織をなんとらるるこのごろの弘法大師の
和歌の御集を見り出しても拝するに、先から
聖こき祝を祈りすることとく、[illegible]ひしひしと胸を打
つことばかり、嗚呼、敵のつくる此世、忘みつ
ある人心、必ず大帝に對し何のおもぶせかある。
斯る折しも御集を拝見しまつりて大御心
の山のごとく高く海のごとく深きを感しまつらず、
どの御係を祈りても天子様の御出かれき
世ならば、聖祝を祈りまつることとく、たぐく流こ
はそうな。左る五十首ばかりを抄出す

五月廿四日

複原製

おもふかも
すもべき時をまちて進まずば花きりこ入る
ことまん
うつせみの世のなんまこと神もかを
そくざらめやい
いかるもるまあひもなきぬいわがーき
時の大和だましい
正述心備
よもの海みなはらからと思ふ世に波風の
なちさわぐらむ
人
かくばかりことしげき世なくぬべき人をえらるが

うたしあらけり
世の中のるある時にあひてことを人との力にあら
はれにけん

おろかなれ

過ぎにしつらぬきはてて国民の心やすめむ
ときぞまちける
家内に射る矢のごとくものいみるまもやかにこを
このたべかりけん
世の中の人におくれをとりぬべしすくまむとき
に逢きぐらしぬ

太刀

おのふ身のまもり刀は天さかるみおやの神の

橋原製

みたまとなりけり

おろかなれ

くにのたからも身をもくだきつる人のいさをを見ぬ故
もとすすむ
年へるに国の力とそなりぬべき人をおほくも失ひ
にけり
国の為つくさむ力あるうちにはいとなすすし
人をしぞおもふ

軍馬

北ふひの場にすくみて乗る人と共にあれ
動かいくらぞ

速船

国をおもふ民こゝろ
なのもとゝ、めも

心

ことゝゝとゆるぶ心いとうしくは
あやふかりけり

旅中情

草まくら旅の出たちの思ふかな民のこゝろはい
さましけんかと

おもふ人

さわがしき風こゝろ外もいでゝ世渡る
民をゝおもく

花見つゝ春日はあすふ花ゝすゝ民の

榛原製

いとまきさし世を

寶

世の中はひとりたつまびとさめえし業こを人の
なかゝらこゝろけり

をりゝ翁んを

国民の業はいとしも世の中をえられまさんる
樂いなり

宝の玉造

さずろきん すくなかりけり世のやゝもてたや
さゝゝ玉といくども
さまゝの玉をあつめて きずなきいえかたきこと
さらに玉ありける

人みなのえらびしうへにえらひ出るきずのある
世なりけり
寶ともいへきものいろ〳〵ありとこまかに職をも
とめ出るば
しら玉を光るもおすみうる磨き足らさる
ことを忘れて

行

やまくしてなし時がなきハ世の中の人のひとなる行
うして
おりさうんて
あやまれおこともこを見あん世の中ハあまりんあを
思ひすぐさば

道

千早ぶる神のひらきし屋をまこひらくハ人の
かなりけり

仁

いつくしみあき物のあるうちばかろこしの空ハふす
庫もなつかざらあや

道

人の世のたゞしき屋をひらかるも庫のまもそふ
のべのはてまで

忠

まめやかにつかふる臣のあんハこそわがまゝりごと
みなんざりけん

子矢

内外やもと神のをさめし我国をうすんしおのこ
心ゆるぶな

馬

人をゆるぶはそんのしるし授けます軍のいはん
たちし業績

波

あらしうとゆんぶいちぎゆく海原の波こそ人の
世を似せるはな

朝

起き出て思ふ事ゆきあしたこそおさな心に
ひとしかりけん

横原制

旅

旅やかれところかはんとわんをうる民の心の
ひとつとりけり

をりそふんも

埋生にあくど寒しゆ雪のしたさうもんし
人を思へば

馬

のる人の心をはやくしる馬のもちふあらうもあん
ろうけり

迷惑

かなしとも思ひ知わもぶなること
あくど人のよのわ

述懐

山のおく島のはてまでも尋ねみち、世ましらんさま
人もあるやと
思ふかなわが民草の
思ひいつけくもるいつけを
うへいいかれと

元元

我のいはゝ立つ身をいかれぞと思へ心花も見る
こゝちもず
をりるものを
世の為にもの思ふ時い庭にさく花も心にとまら
とらはけり
花鳥の上も思へでうづ民くに心をつくす

榛原製

春かな

夏山み

年ふれおもひやもでも山みを浪みもねハひ夏な
うらけり

筏

ひとりしん早瀬をくだす筏にはかへりて波もかゝら
ざりけり

述懐

お為の民の力をあつめなばいうる業も成る
とぞ思ふ

道

まこれはよ早くもあやふしと思ふ度ふ

入らずもあらなむ

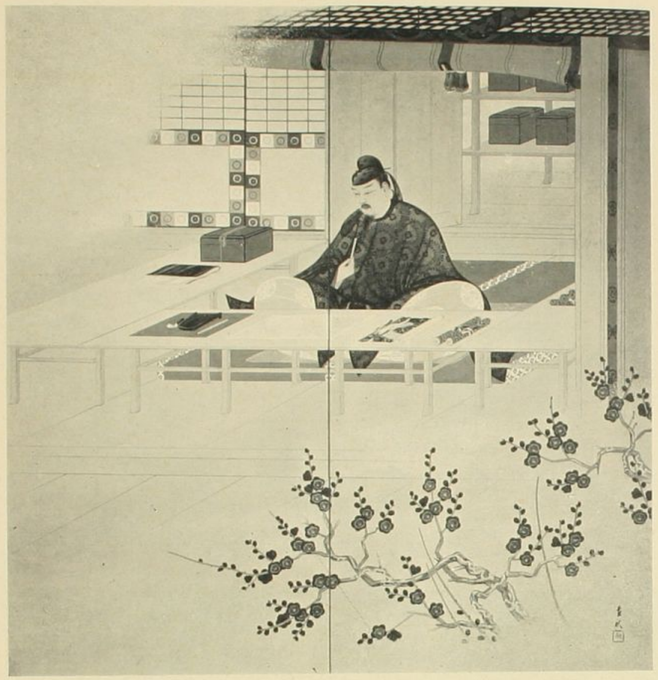
蓬間舟

とる棹のこころ長くもこぎよせむ蓬間のい舟さは
りあらなとも

○日本の家屋が外国の美と比しても特異性の多いことは言ひまでもなくへども、日本人の美に慣れてゐるから、特異とも特異とも思はずに居るが、給る者いて見ると、おやくと感ずる。日本の家屋などは珍らしく面白いものである。別して其内部の面白味がある。全体日本家屋は概ね開放式になつてゐるから、室内が明るく陽氣で、戸を開けば全体が露出する。だから之れを給ますると

榛原製

ると、室の隅々まで明るきさ露はさるるばかりである。床も床脇も柱も窓も戸も襖も戸も縁も天井も縁まで一切悉中まで入れば入るほど複雑である。日本の家屋は割合に壁が少なく襖が多い、襖を開けばどの室も通ずる。そこで土佐絵の式まい、馬瞰の茶室の見へる書き方がある、こんも面白ろい工風である。書斎の書斎の様式、茶室の様式、法があるやうに、同じく室と云ても美くの達つてゐる。複雑ひある。茶室すい食事室の様式、法があるやうに、同じく室と云ても美くの達つてゐる。複雑ひある。茶室すい食事室の工風がつて、入口の一方は袖垣を心つて美を遮ぎを隠さん為めに入口の一方は袖垣を心つて美を遮ぎる、美ることもい何んでも多い工風ばかり外人から見ると



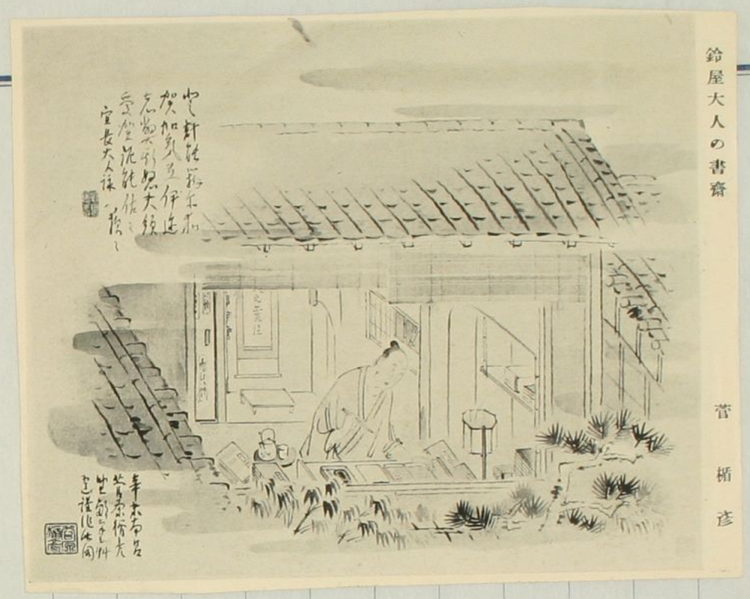
紅梅殿の菅公　（菫丙會第十一回展）　磯田長秋

えんが雪国に感ずるエドワード、モールスの日本その日くるい、えんが特に畫さんをみる、その神経を用いてある枝い船板である所を通かある。亦廊下傳くる便所のあるのにも、モールスは構造の野蛮なる所を目が着いて、えんも後もしみる、モールス新英、北京の村で等を見えもちろんと而も日こつもやすい事柄をこのやうな隠す所を日本人の美術的洗錬がよく現はれたと賞した長う。要するに日本の家屋の内部に美術的に出来たる特異性がある。西の建材としても通ずるものがあるが、通れを畫することが決して容易でない。西家の屋内の人物神々をもと畫するが、多くの人物が中心で、日本の家の特異

複原製

性を[illegible]に西ハ[illegible]思ひ給ふ比日本
家屋[illegible]心つきき思ひ寄る
ことを書きつけ[illegible]の図ハ庭園の[illegible]の
切抜び代表的のものでこの物語ある、
○今日数巻中文行堂を訪ひて四巻二十四枚を得
た庚永[illegible]る間の証書[illegible]成
善提院[illegible]、北寺未だ考へられず、証書中
殿村姓[illegible]寄の証書二三通あるを以つて案
するに伊勢の寺と推せらる。文書中年号ある
ものを年代順に記すれば左のごし

庚永　永享　文明　永正　大永　天文
永禄　元亀　慶長　寛永



紀元百六十年足利時代に徳川氏
に到る、孫権の文言にあるように
の古文書部類にかくして可ラス　五月二十五日
○西園寺が大命を拝し組閣と市つて昨日即ち四日目に
組閣が成つた。子爵が七十五の高齢を以つて大任を市つた
のは真に世情に恪く、大方悪憎の党略をしも厳後
の奉仕をと、辞退もせず難局に向ふ覚つたのであらう。此の
内閣の組織が誰れが考へても容易でない。政党を
包容し一面に人材を収容せねばならぬのである。
政党と親しれん共の権衡を考へねばならぬ、世禄の
重いものを取れば老練内閣の誠うがある、首相の縁故
故のあるものを採れば情弊の非難がある。首相の四日

榛原製

間の努力は容易のものが無つた。幸にも入閣拒絶を標
榜した政友会も投票することゝなつた。民政党の長老
山本男爵を捉へる難流があつたが、捉へ得た。此
の非常時に当つて何人の輩出か民政政党の両党
党首が進んで入閣することゝなつたが、音を
が外れて山本男爵の二名を拉し得たのは切めての事
である。いつも閥歴が選叙の標準とする共型を破つ
て有為の新手を抜擢したのは最も喜ぶべきが、
えらう政内閣だらんと氣を失ひこと紀憂
の帰し、両面展開するの新意を期待さるこ
とゝなつた。まづ陸相外相は未定であるが、世人の注目
はえを集まつてゐる。要するに此の内閣は強力内閣で

あるか否かは(憲)法制し難いが挙国一致内閣なるの面目
はある。唯々これを強力内閣たらしむると否とは一に
繋つて閣員の協力の在る。閣員の協力は非常時を
思ひて至誠以つて公を盡すの精神が大切であるが
目下は首相の統制(軍)を得ることが何よりも肝
要である。何人と云つても亂れ切つたる政局を収めること
は容易の業に無い、善く人心の不安を一掃せね
ばならぬ。進んでは農村の疲弊を救済せねばならぬ
す、満洲外交も善處を要する。陸軍の綱紀政
堂の革新敢く未だ緒に(皇)るに至らず皆政堂を
委して絶望とさるゝに至るも、此内閣を救匡の如待
をかけるなり。新閣の任実に重し、新閣もまた如待

を裏切らしむることと存ずる。国民の援助を待つ
ハ勿論であつて、不相変経命内閣が終始らしむること
あるべし、果して何人の日を待つて時艱を収拾し得る
ものぞ、軍民も政堂も猛省せざるを得ないのである

五月廿六日記

南喜一郎はかつて海軍大臣をつとめたことがある
山本権兵衛伯の首相内閣に献替したことが
ある、山本は力のある人たるが治める人たるに
後の治める人である、朝鮮統治を八年の
間治下の悦服を得しむるのも、本人の和全をなす
性格と温情味があるからであらう。
今日の内閣まで得た人が多い、山本伯爵

中將男、小山司法、永井陸奥守なる人にあり、大体政堂出身者も人格者多く、堂奥に入れしものが無いのをきたらず、永田市右衛門が入閣とか、全く人の権衡で笑ひたくなる人の集の書もある。

○人誰れか故郷を思はざらん、故郷を思ふ人の私情である。故郷にしんと産めるもの、一山一丘一木一石皆なこれを親しみがある、これを捨てん誰んか感懐無きを得ようぞ、而して大宮御所に御住長遊ばし、張紅中を維新の時業を遂げさせられ、都を東京に移して安城を住居にせ給ひ、京都へ屢々行幸あらせられる、御感懐無つた。折々行幸あらせられ御感懐深かるべし、これ唯れ御集の存する御遺跡を訪ひ、しるのみなる。前に掲げる歌しるの御命を拝しなば、今の懐郷の御書を左に掲げる

故郷夏月

ひかし山のぼる月みしあるさとのすゝみ風こそこひしかりけれ

（主の名）

京都をいでゝ、ふるさとにかへるころ駿河にて

わかどのゝ下ゆく水の音きくもこよひ一夜と

ふるさとの

富士の木の葉をあつめて書とすしなるを

九きて

ふるさとの木々の花葉の白き花を袖とぞ見る

姫しかりけり

もりまゆみて

加々の高雄の紅葉ちかいらん折りとるとても

みてまもるを

加々

年をへてかへりてみんば加々のみやまの人もおいぬ

けるかな

加々井

わが妻見に汲みつときゝし祇の井のあいいまるに

きつつめしきこゆ

榛原製

加々松

ふる里ととひてし人を問ひて見む わかうゑおきし

松はいかにと

加々芒尾

園守やひとり見るらむ芒わが集めし庵の秋

芒の花

秋別業

とる月の桂の里のうつり所秋こそ西きて見ま

くほしけれ

加々

古秋の花に咲ふに老きは芒まるれし都を

りけり

かなの末

思ひいつることのみきしなかのこゝろもとの木立
さらぬなど

夢

ひらちかの新のみきくれあくとみし夢のをしくも
覚めけるかな

雪花恋

をさまりそへ一世の春をしのぶかなあるき春の
花のさかりに

恋

ひらちかのみおやの御代の昔もことある毎に
語り出つゝ

横原製

ひらちかのみをやの御代につかへし人も大かた
ちりちりになりけり

おんな格

あるときの花格を見ごとに千代田の雪に思ひ
やるこゝろ

何れの御御を新しても真情の流露を見る、帝者の
和歌なれど技巧的に細工がなきのみ、そこに帝者の面目が
あり[illegible]導[illegible]も亦そこにある。

十月廿六日記

○山中進が新潟県国志賀町を長くして折、明治天皇聖
蹟誌を編纂し大正十三年末中央財団と共に
出版し、これは次天皇御巡幸の際のことを叙し
たるものとして有益しきものなり、北区村松沢

植（所司代任用者附長）に嘱して此書の序跋を受け懇請したることを種々おもむろに感謝することあり、自分の此八年来あるに滋養して御出者の御事に長くさゝる故、別して此書に数へらることがきいた。此の要あることを秩序もなく書きつけて遺忘を備ふ

此巻中に南時の記録の附録を複載せるは如何なる理由なるか。南時の国学の師なりしを以て国学者の道義を記したるにして、裏面に供奉者と称号割を記したるなり。なほ此人数は三十八人乗馬五十六疋と云へり、奇事に供奉者は右大臣岩倉具視卿、参議大隈重信・同井上馨、陸軍中将大輔大山巌、大蔵大輔川路利良・内務大書記官品川弥二郎、宮内卿徳大寺実則・内務少輔友幸・宮内省官吏の外に移動七人（大輔）佐々木高行（一等侍補）佐方久元（同上）高崎正風（二等侍補）伊東方成（一等侍医）香川敬三（大書記官）山岡鉄太郎（同上）外十数の侍従の名も見へ、

南時の右の料は必ずしも皇室のものと見るべき南時節度の

畫

上等　一人　十五円　勅任
中等　一人　十二円　奏任　判任下士官
下等　一人　七円　等外兵隊者　従者

泊

一人　十五円
一人　二十五円
一人　十三円

当時の物價のあがりしこと実に驚くべし

新潟の在和は礎町通（行）六ノ町四番戸成瀬の別宅で市内第一

繰中第一を誇（行）在和の御泊決定せし特に工事を急き遂に一月廿七日（此の夜）路の今移して新潟四の長徳寺

に移り、御駐輦中の宮内の装飾の業務を極め其

の詳細は当時の新潟新聞の記事に引用し当

倶奉賞の宿泊は新潟の豪家を以て充てり

岩谷右大臣　侯爵共

大隈参議　其他

井上参議　其他

徳大寺宮内卿

川路大警視

荒川大二方

八木岡直方

藤井忠方

長浜久吉方

高橋次郎方

標原製

秀川山名大蔵卿

大地主南の家は宿泊者と共に

を多数収容し居り

新潟御駐輦中新潟学校に行幸あらせられ

たく

鈴木長蔵方

豊照校長は新潟市

新潟学校は明治五年十一月の創立にして資本

金十万円を当時民間募り同六年始めて英

語学科を設け、同九年学科を改め

百工化の学科とし専ら画術を以て之れを教授

す、又別に講習科を設き以て化学に入るの階

梯とす同十年二月官立新潟師範学校及び

英語学校を廃せらるゝ吉縣継て之を維持す

是に於て当縣師範学校（宮崎村舊学校所内に仮設す）新設の校を後校と称し、四校（百工化学、英語学科、講習科、師範学科）の学科を合せ更に之れを総称して新設学校と云ふ

とあり新設学校の沿革は略ぼ複雑せ新設病院と新設醫学和を合ハせ南時ハ県山氏支配下に在りしが為めに行幸あらせられ

新設学校に行幸の御手間を賜ハり優渥学校生の面余の勉るものあり

新保繁次、小林忠義、上村安義二回

萬次郎、吉木良次（以上百工科学）山田文二郎、今井

織大郎、野村九郎、曾我清次郎、[illegible]

以上ハ皆余か新設学校を去りて後の卒業生徒也

陛下の行在所嘗て御小熱所に当り居る豪家なれハ特に

家屋の修繕を為す、府庁所ハ特に新築し居所少なく

す、新濃の桂参議ハ白勢人吹くの土木を興し分

田の石井新太郎も白勢人吹くの土木を興し分

義伊左衛門も田校を、又等の任務ハ勉強なる支

弟しなりしけれど、義務的に為し居るまもなく新

発田の行在所ハ、新潟の美と白勢成蹤の家

邸を、南時白勢の豪奢を以て勉内を飾り居れ

るハ美美を尽し居るハ論なし、勉下に於て特に新

酒の栄を得ぶ。白髭のみひげあるとかも無記ることなく、桂や石井が駐蹕の光栄を得る。垂曲は南家に記録あるて後され居さんあり。

平家家の都落（徳次郎源氏後の名）は行幸四行在所に於て代取の際主子を奉しる故を以て主鈴を許さん肩衣つけ烏帽子の風儀殊に人の目を惹きとあり。平家の光景も行幸行所に奉鈴を許さん、指低は今為家に有りあんども、当日の不参と記さんもあるも、他に不参あるのみ。えとと、或は通達が おくれも、遠路間は会いさりしもあるんが、当時天家の栄転部 辰田村に有りしも也

行幸四御禁五十公庭（村御屋）の記子中見

遊し難きものあり、陛下は特並移を愛びさせられ、西京に有る思をなすとも 仰せられ北の冊子に左の如きに記るあり

御車は五十公庭の移蹕手まかくらも給ふ、主上は女装をを御遊りて「京都に入るか 板をを仰せらるきとかや、浮呼吸大事は 汝いかはかりか京都を慕ひも給ひけむ、今はかの古き都の憂 桃山と鎮まり給ふ。えも大神心こうてうと 人の導まうる。五十公庭四の並移木も 大事の大神心を留めん為に長き紀念とう

五十公庭は余が墳墓の地なる所に、西後北の移蹕手を通らば、光彩北を進懐するひあらう

陛下い御巡幸の時寶永二十八年頃い御面を写し上られ
かたや大膳職のもとるもいに一向渡んものが、つ谷相こ就て僅
に記さんもあるの、向場が生きた書巻を献いれことや
木曽ひ望果を献し殊のふおもいるうつたと立あ住るる
き奴、陛今小学校や寺院を行在所として御泊ちさ
れた所が少るるいのが、解地ひい御不自由を推察
し奉る、学校や寺院ともに臨時修繕や御座所新設
の事るるる雨倒のあられことが推察される、陛下い御
質素のあるもられからも、敢て表るものけさせられるの
つる知れんが、供奉員ともが陛今困
つたと思うる、上毛川御巡幸の時ちどい時の永山
殿今が年上頃を居つて献上し供奉員の姿料に供し
たと見られる、生憎天候不良が漁獲ちる歩料に窮し
たとある。

陛下御巡幸中の御歌い記さんとるるが、上毛川の記るの
中ら元田皇后宮太夫ら言時侍補の許く皇后宮
の御歌を拝ったことが見られる

はつ雁をまつとるるきんこの秋い
こしちの空の月こうめうんける

刈羽郡の石地(今色)迄の時内義人竜の宅こ御小憩あり
後年駐蹕の設けれ時事いすべて軒旋し写、大
限重信の揮文い物字原田る嵯し、書い日下部る
書かせた

明治十一年七月二十日新潟令永山盛輝　う谷迄

正前侯長に会し此布達あらんことを願ひ奉る御巡幸に際し御供天覧に
賜ひ並著名拝謁等御巡幸に際し御供天覧に
者に所持人名拝謁未厳粛相況の本藤才二郎、
一の差出方拝達願書に有名の古参
外四名異記来る八月中白山公園地物品陳列不
を本藤に伺ひ御覧に勧業小博覧会開設開始
候可得共に相成に医書を設け一日展列候条
なりとあるが之れは奉迎の一準備と考へる、自分
の家に神代土器を生時代氏人の家
松木氏に手に入れる家にあるものも出生時代氏人の家
に有り（松木の妻井忠大郎大倉市十郎も妻
氏人也）聖上の御臨幸を得て義千拝謁の御

模原製

聖上に奉る比。
此後御巡幸中眼疾患者の多きを御目とする金
き千円の御下賜あり、是を基礎として出眼衛生を
ることが第時の新聞紙に掲載されも
御巡幸の折の市民の歌に「松の花」なる
り、表家の曾祖母高子の居の歌ともし歌も相めて
ある

あまつ日の光さすかの心地して
あふきみるさくまは面かりけり

石井孫大郎自記文書の内より玉座拝観のことが見へ
てゐる

玉座には御刀掛け高サ四尺位 御椅子テーブルも
黒木御テーブルに金襴を掛け居る上に二三基御
飾りの内御香炉と拝見する、形の皆別々なれども
御品は何れも唐の金光り（俗に紫寶燒きのや
うに有之）御テーブルの黒木は一枚板丈内る
の動かざる板十文字に掛け居る 棒は（凡四分角）
皆金無垢なりと仰せられ候 次に御
厨四畳半霞の格天張り敷板は皆本黒
漆塗りにして 敷板の上に絨毯敷の御敷板
にして御厨全体金襴の幕にて囲み御入口は
重畳んにて総角の結方にあり便穴は絨毯
仕掛にて奥第七部屋建物は皆畳敷にして仕掛

榛原製

而して御泊御書御休所共丈先きにして御飾
り付用意をなすべきなり 御厨品は四通もあるなり
仰せられ有之候 尤御実に前段の心に徹し候
御直筆先きに御部屋の方に待経日は今日
持ち先達 玉座に入らせ給ふ間もなく香の薫
り我々控所まで薫し来る 一同奉感の
陛下の東京御発輦は十一年八月三十日にて七時を
期して御乗り入らせられ、加賀屋敷前を経て東京駅へ
出ひ、二十九日と日を重ね東京へ 累進御相撲
市は今ここに五十五年前に当る
負方が高田部屋の花社の渡中の力の敷負に江坂
無義をなす人があって和 義力なる人の

経歴を委しく述べることも無のだが、北人が石油と関係のあることを初めて北海道に行つた井上が御巡幸の節、新潟県内の石油鑿井を立てるものもあるのを見て井上は日本第一と称せらるし、所謂大事業と手堀りとして長年の面白かつた是迄機械堀りを試みよ、其の新しい諸器械を持出せ、自分今世話をんと云つて鑿井器械の研究をん江坂、石油業者の研究をる中川豆腐屋と言ます、中川は豆ちく井上に従て上京し自分も共後出京して井上の伝家となり自分の為に工夫を尚と勧機械械を石油べ中川は工部大学へ入り学を修めた

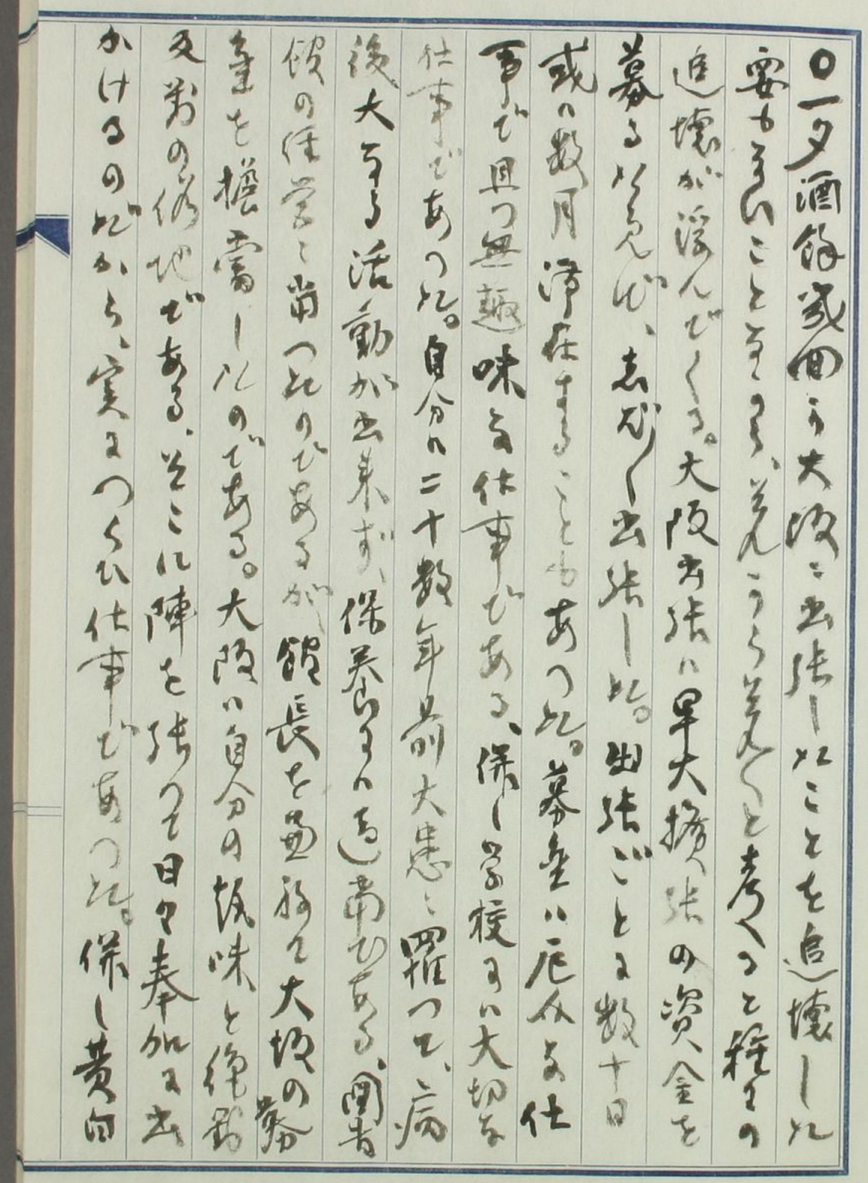
複原製

追々石油事業が発展するので日江坂の義務義務で入り後と相談せうとの初めもあることを江坂の書翰で知る実も載せのの他人の人要るることとなるも私のもの家世人と就て往事も思ふのも一興である、立十五年前自分が十九歳で東京と往復中びあつたこうは日と於て此生涯を日晴しろいから書いたるも高明を思ふことかなうくるおもしろい。陛下御巡幸今亡びなるもかし私家の光栄と誇り家無くそのことなる、今日五十年の表彰を御巡幸の南時の輪ふんの心実に開化の人を以て北の未開の盛業を思ふ毎に感慨を禁じ得

ものいうものがある。事の大小軽重は比較のものあるが、
其の夢つて大限光度に尾張に帰後に入り
ことあり、此時は日比が国の書とそれおのづから来首
の衛を蔵り、右治不を定めることとなる待遇前端の
準備実に容易あらず、吾が家と一信さるに
為りき主人は十日間寝食を忘れて治療の役備に費
誠ちくうらしめたるは其の一例に、殊る夫人も同様
のものなり、為れも夜昼を明め使命に奉仕せり
さて、如き大旅行なれば、斯る備えを幹なることの甚
心の容易ならざることを体験したれば、更らに第二信
まる大規模の御施りを供奉奉かめ、はかり業
心しるかい誠を想像に堪へあり　七月廿七日記

○家郷に羽陽義塾の油絵の小幅がある上顕を
此の紙をつき添くて置山の様がある羽陽とん何人
か入しいか知れんとうたれが後を秋田の小田島武
びあることが知れた。解体新書の絵を書いたのも
此人で、解体新書の、後を三年を経て、終
に気がつかずにおくれ知れ
ハ学問的人物の画ひあるが、家尾の絵
ひあるが、なかなかよく出来
ひあるが、此人は三十二歳の若齢で既に作品の
存しあるもの甚だ少なく、之から孫尾
すべきである。但し六月鄭の書書骨董
品に此人の絵が毒しくあるから、去る
数めておく

七月三十日



□

小田野直武は字を子有、名を直武、通稱を武助と云つた。羽陽以外になほ玉泉、蛙麓亭等の諸號がある。角館城代附であつたが、後には近侍として義敦の身邊に在つた。少時より繪畫を愛好したが、長ずるに及び如何なる人に就い學習したか、その邊のことは不明であるも亦能くし、義敦同樣進歩的思想の所有者であつたから、夙に和蘭の事物には眼を注ぎ、侯に隨從して江戸に出るや、蘭學者の群に交つて常に見聞を博めてゐた。前にも云つた通り、平賀源内を藩政の顧問たらしむべく、重役の益戸助四郎（滄洲と號す）に推薦したのは彼だと傳へられて居る。斯る次第で、源内の南蠻畫談には前々より共鳴してゐたのである。ところが、今は源内の說話と慫慂から主侯の義敦が動き、共に研究せよと命ぜられたのである。渡りに船で、そこには多大の便宜がある、彼は欣喜せざるを得なかつた。そこで鋭意研究するに至つたのであるが、斯る結果は義敦が『畫圖理解』のうちに『プラアウインデク。ベルレンスブラアウ。ウーエウレルトアウブ。コヲルト。アラビヤゴム。此五品小田野直武始て彩品の要用なることを得て予に傳ふ之。』と在るが如く、遂に油彩畫法の大體を會得するに至つたのである。彼の杉田玄白が、前野良澤、桂川甫周、中川淳庵、嶺春泰、桐山正哲、石川玄常等と共に心血を注ぎ、四年の星霜を閲して成り、安永三年に上梓した『ターフル、アナトミア』乃ち Anatomischen Tabellen の譯書『解體新書』の挿圖、解剖圖二十一枚は實に彼直武が試みたものである。

□

そして同書の跋文に『我友人杉田玄白所譯之解體新書成矣。令予寫之圖焉。夫紅毛之畫也至矣哉。如余不佞者非敢企及雖然又云不可圖。怨及朋友嗚呼與買怨于同胞寧流臭於千載邪。四方君子幸恕之。――東羽秋田藩小田野直武。』と在るが、安永三年と云へば、司馬江漢が銅版で『天球地球圖』や『東都名所』等を出した天明三年からすると、十年程以前で彼僅に廿六歳のことである。また以て這般消息の一端は窺ひ知るに難くはなからう。然るに安永九年の五月十七日、なほ前途春秋に富む三十二歳の若齡を以て、鄕里に逝いたのはあたら遺憾の極みであつた。彼も職業的の畫家ではなく、それに斯くの如く早世したのであるから、義敦同樣遺品は極めて稀少である。秋田小田野家藏の『少女愛犬圖』同、奈良盤松氏藏『笹ニ兎圖』同『唐兒童圖』同、河田與左衞門氏藏『蕨飛虻圖』同、佐野某氏藏『風景圖』等の如きはいづれも聞えてゐるものである。子の小武も亦父の風を受けてか同畫を能くしたといふ。小武はその號である、天保十年に六十八歳で歿した。小武の姪に當る梅子も、亦同畫を描いたといふが、夭折した爲め遺品は殆んど無いと云ふことである。

掴もうと最も遠方の仕事として北の海に出ることが出来ないから東京へ出て大阪
ばかりやっていた。自分は若いから東京へ出て大阪
といふ全く違つた風と性格の持主であつたので大阪
人の嫌ふ言葉を耳にすることもあつたが最初は随分
不快を覚えた。しかし追々大阪のことが分つて来ると、
不愉快も薄らぎ、終には大阪人の長所、殊に経済
的の長所は到底東京の及ぶ所でないことを感
するようになつた。

初めて大阪へ来てこんどは、天満市場から、取引所
の理事長であつた磯野市右衛門と朝の散歩社長
村山龍平氏と巻紙の世話を依頼された。北の
人を頼りて出張した。大阪で学校を

標原製

関係する人も若干あつた。その頃川中橋な
どであつた。此等は勿論地の人であるが、且つ東京に在
る学校の資金を募ることが、大阪の人氣に受
ける筈もないので、学校と関係を有つ人と最も自分
しかない。を無くしてしまうと、だから高初は実に困難
なるもので、校友会はあるが実と手の下しやうもないう
ち。自分らしい村山や磯野氏と志が強く足を運んだが、
北の人とても大阪人からは委頼があつたが相違な
いが積極的の援助を為すまでもなかつた。どこ
でも同じことであるが、金を寄附することは誰でも思
好まないことであるから、義捐金を運んでも面倒
ら出来ないので苦慮した。そこで自分は進んで

光つ比。どうしてもセコンドベンドいと行くよう外ないと
甲の寄附させようとするまい甲こ愈意の人を
光づ説きその人をしん説かしめることが間接手
段ではあるが、却つて要領を得る比らうと。そこで
北方明を巻集の手始めとして、幹旋を頼まる人
の紹介を求めることを苦しい比。自分の親戚住いひ長豆
面をやつてゐるの比から、自然自分に対し熱の
毒の情が起り、自分の為めなるべく勧誘しも
くれることが始まつても来た。中村徳四郎氏はその時
高野分社の社長であつた比が、自分を同情を寄せて一
時志きりの勧誘をつとめてくれた為めに成口が容

中四郎のごとき手腕ろい交際のある人は固より
で別金を捕へて千円位の金を出させるのい立派ひ決
するの巻者の事で居るが、保し出金を流すの
の裏まい交換問題がある。即ち金だからうく近
間に募集い出来ない。中村もそんをいつてゐるが、各
校い学利事業でまいから、交換問題が起つても
もつけぬとこふもゐる。自分を援助を与つ比ふまい
他まもあつ比。大隈先生の縁故のあるものい時自分の
援助をまし始もしてゾット後の事ひまるが、警察新
聞の市の区長であつた時、自ら区内の富豪こ金
を募つて相当成績を挙げ比ことともある。先こ角
長かく陣を待つてゐる間を追ひ出さんからそんくと

組合もあり、誰れか出しかから俺れも出さねばならぬまいと流
説するやうなことまもなつた。株式会社引受あり
ぬ会議会で、野村徳七が千円出したとかいふことが、紙
幣とまつて、野村と日格の店い飾り文句を云ひすれ
家業とツンク流説するやうなこともあつた。
いつも新聞紙等募集を始める時まで世論を頼む人さを
招いて小宴を開くことが例であつた。当校を冠りたのは
事であるから、さざと来て義捐者を呼ぶ云
うつたがある今々島徳蔵が生る社つて、義捐者
を呼ぶ前べ募集がつうぬとこから、共言を従
つた所、立ちかつもてみた。土長通夫や溝田桂造
さの七十箇が、坐てを立して、遂に元義附いた

ので大設いこれで無ければと一笑したこともあつた。
大隈侯爵が自から大決を出して募集と接助
を無くれたこともあつた。侯は岩下清周の清を突ん
で北海道の鶴上と株式仲買を多数今も清流
の如きは、仲買を表はせ、亦岩下とも表はした。その後
果は的面で即性と效果を見た。北海は教育事業
だから、それを接けるとのひろく大隈侯の市
業だから金を出すとこの不合理のことあつた。
土長通夫などは夢つて大隈家と合夫とをつてゐた
こともある。傍因から、自分らも出金を請ふた数を
二倍して出く庶民は一人である。その代りお得意の
儀大夫を侯の旅館と称して候を困らせ、傍聴

を命ぜられ老躰も困つたことがある。
大隈侯が伏賀に帰省の途次大阪に立寄りの際の清五の御の自分も来あから鹿児島に
入口の多数の有志の包囲攻撃を受けた此等
各方面の有志の侯の滞在中一定の関係ある国
体や事業に対し、祝賀若くは涙説を陳ずと
するものであつた。こんが為め侯の相撲くから夜に
入るまで、各所を歴訪さん利る家に涙説さん一日
七八ヶ所に及んだことがある。こんなことも確うる
義集に河野の援助とこうつたやうに思ふ
若虎の長帰在で毎日心臓を砕くのであるがこんなど
心任を病まずまんまいい。日々切めて五百円でも
養があんだ氣も酒もあが義日も〳〵度義が無いと
拝ふまい氣がして眠も出来ないやうな仕末で
寄附帳に一行書くのが何寄りの慰安であるかいな
かうの〳〵安々でない。常つて二三ヶ月前千の金磨
つて仙寿に贈る、宅に呼内者が訪ねて来たので
自分は我んな大阪に出陣して得た苦吟の詩がある
義は一句を志ぼう出すに二三の句を書くに其こ
が心であるといあて出して見せたらそれ其こ
れの迷退い笑つてこんこそキンスピレーションの詩
だと笑つたことがある。
大阪で大きな富豪とならば渋沢、住友、藤田の三軒
である、こん等から大きな寄附が貰ひるるう、寄附の

募集も無味のものだが、およそ大商豪農など寄
附を募ること面倒でなしても結局実入りの少ないもの
はない。三新かくも寄附を受けなば新市場はいが骨折
りの割合には収穫いかと少なきつた。実は二人千円
ついでも口数が多く出来ることが出来まい、誰れが
出しとと言ふことが問題である。自分は
至誠の大なることが問題である。自分は
あこ任務を積んで結局つまいことを考へ出した
笑ひで失敗したのもつまり大一番大金を摑まん
とした為である。笑ハ株式の藪田が文初一
萬円出すと云ふのを三萬円に引上げ終に五
萬円まで引上げるに承諾を得た。こんなる勿

論骨が折れて一ヶ月計り何るも拙つた力をこんと
集中した為でもあり、藪田の一族を大隈家に付
ける。大隈侯をして藪田を訪ハしめなかつた。
藪田も光栄と感激し、なぜ新市場を設くるまでの
の川海を設くるまでの、藪田の手元が俄に尚
れて来資況が成ことき状態に沈淪した。こん
が偉うて三週間の短日時の変化であつたに
堪への運命の制と考へて悔恨
甚しいことの思かと思ひ自分一人が斯くまで
が無くつて単つたのい実を大失敗でもつたかツルイ
考を持つべきことのあつたと、志みくと感じた

大阪へ出張したのは数年前で、武田もあったが、房後後藤
君と酒を酌みしたことがあった。十年の久しい間で大阪
出張の其頃であったのだから、酒を飲まる方法を得る
の困難は、此間も殺さ娯楽〳〵いことを云へば大阪
毎の遊廓、文楽座に限られた人
形を見物、夫とも〻へたことがあり、月ヶ瀬の観梅
に出かけて帰路竹車が土堤の上から転落した
ことがあり、高野山に初めての巡礼をした其頃は
まだ女人禁制時代であって、登山の道路は険
峻難であった。大隈侯の浪速入りを迎ひ帰尚
を一迎するの機会を得、侯はミントの歴史を
語られた時の興味的の交りをやったのは、広瀬南湖

と大阪新聞の上野理一であった。道化や西鶴契
沖等の墓を捜がし回ったこともあり、天満
霊石と交って西鶴や上田秋成の談を交へたこと
もあり。他後出身者で各分社の幹部を長るもの
が三十人計りで自分を招いたことや、外山修三翁と
招かれて無後不を初めて大阪と謝いた時の共心談
を交へたこともあるが、毎日仕務に没頭して自ら
娯むことときことは、少うろうろの。そして自分の酒
の回復も大阪より養生が媒妁となった。それは大阪
でとうとう、大阪を根拠として長駆備中へ赴いた時
田辺製造の紹介で、初めて味噌の為納税演説
野崎武吉を訪ふた時、いろ〳〵歓待を受け、北の主

人兼と一族が大変酒豪であるので、自分は禁酒中
なら言い出せないと酒を飲み始めたのが恰度十年目
であつた。
大阪は騒々しい所でいくら慣れても眠が出来ず、無理
一回見ようと京都へ出掛けたが此れも夢を破られた。
大阪へ帰ると、堂島のステーションから早や事務的に
きつと就職へ戻ると電話をかけた人を訪ねられ
り手紙を書いたりして、東京へ出る時とは全く別人
まるで、昔の自分から土地は斯くも氣を移すものの
かと驚ろく位であつた。多の神社裏婚に羅列
ゐたかもしれない。
自分が面白くもない募集生活を大阪に送つて、果して結

樣原製

局どんなものを早大に寄與したか今振返りの記憶も
ないが、自分前後数回で十萬円位に及んでゐるであ
らう、さて何金でいうと此の募集の為めに早大
が大阪と後来いろいろの縁因が続ぼんだ、其の間接
の效果は寧ろ大なるものがある。自分が大阪滞在
中悪口を言つてもらも書出してみた表彰多は不思
議な自分の同情を寄せ、早大の礎市島こと云
ふ名此しの下に、早大の基礎を作る人は銭金家の
大限でなくて商人でもなく、稼の下で苦学してゐ
る此人であることを記憶せよと書いたのが、其が
らいう方々へ募集を出そうけると、此の時が志きそう出
たので、自分宣伝とそうしたこともある。

身が大酒で交つた人が多くあるが既に君と矢倉したのもみなそうだい、記録の迷惑もとう思ひ出るまゝ書き付けんが左の如くて地内既に亡人となつたのも若干ある

藤田平太郎　住友吉左衛門　土居通夫　浅田桂造　今西林三郎　磯野小右衛門　島徳蔵　渡崎
中山大一　中村徳平　町田忠治　村山龍平
○宮地茂一　○吉徳平　野村徳七　○喜多又蔵
久原房之助　○岩下清周　○藤田伝三郎　○金澤
稲次郎　廣瀬仁三郎　○鈴木馬左也　関一
○武内作平　○水山修造　中野　○加島未亡人
関一　○秋山義兵衛　○小川為次郎　砂川雅峻

今井貫一　○土居元作　○鶴原　○秀島露石
繁雄　郡司郎　○近藤南州　平田徳衛　海老友次郎
庄保　○小河滋次郎　○山本知士　山口玄洞
角田勤一郎　菊池恭三　木崎愛吉　鹿田静七
西村天囚　西田左左右衛門　○伊庭貞剛　幸田成友
牧野元良

自分が大阪洋館中一日を惜しんでいたのは行くとすぐ黄雨びあるあるこは流石に天皇の居城（御座）と言へる大阪は近畿で、俗界大阪と絶景と異なる点で、大阪附近の気体をいせうに思ふ。私人の第宅も多くの見れが、地形の南向きいのは森四時三方の第宅のある。御島である、庭園の大規模ひあるのは久原房之助の別邸である。六甲山を前に見て、庭の欠域は海に達してゐる、海と接する電車が通ってゐるが、また久原の欠域内に属する、近山ともも望まれる松の樹が海のうへに見える、六甲から織成びあるのが、あも格奇放しても深みをみる、ロシヤ風の建築さえ見れる。木の大建築も面白うく感じた。住友の別荘も風流に充ちみるのがいとんは大阪を離れるの須磨びあの松を風

標原製

逝の中心とも海岸と称へてある

自分が西へ〜大阪に出発した時は未だ蕾が多の如くあるが今は大体花となった。菓花の咲く頃大阪の郊外は一帯に優する満目黄一帯び、黄金の都会を繞るあさはしい光景である。大阪の夏は庭に入っても所謂夕涼ぎも風流。暑熱を防ぐ為に庭に冷水を撒べて納涼の情趣も面白く感じた。牡丹の咲く頃池回遊の一興は北地の実に牡丹と京比べる処大阪の大家庭園、テーブル、クロスを敷地もって牡丹の花を敷いて飾ってあるは外国人の好みとの事。

大阪で雁治郎仁左衛門の劇を見た時は場内満員で身体が動けない程で、いろく流行を空も特徴を今得した。大

改ハ行ンと言ふなり。儀太夫が本場で利屋東京の比ひなり。
自分が大阪で感じたのハ、北比が コモーアの本場で、芸妓迎家
の起るのハ偶然ひないと思ふ。御大典の時ハ全市二日
間ハお祭り騒きで、数多の破格な除手のことを行ふと
から、各戸門飾花を出して騒き回いるので、男ハ女となり女ハ男
となり、主人が僕となり、僕が主人となる。扮装で、街頭
の有様ハ真に驚くべきであつた。凡そ知る限りの家ひも
無く、乗つて、人の詩あるを任せ、ちやんと衣を貸して化粧をし
たやうな騒きで、まるで芸妓迎家の別世延長であつた。
滑稽、妖諧、亂舞狂跳、どこを行つても真面目のもの
ハ一人も無い。斯る場合を切つてふ人共の為めの芸妓
あるのだ。全市ハ狂亂狀態であつたが、さて浪華ハ

榛原製

花ての喧嘩ハ無い。勿論酒舞を含んでゐるけれども、街
笑が絶えない。そこで浪華の特色ハ、あるとも言へる。浪
う、数を尽す故、たとへ僅かに、死人を出す程の盛
の一体が数を尽す。暫時抑くんで説論を喰ひつけ。御祭り
ふさの一から、扮装とを忘れたのだが、彼等ハ工
風と言を欠き、斯る不去の扮装をしたのであること
ハ言ふまでもない。

樽酒を解いたから注方の割賛で、自転車を運んだ。
西洋料理ハ浪華の料理ハ、ちがい別し
ルが料理ハ、よかつた。慨して浪華の料理ハ、ちがい別し
て酒ハ別等でうまい、酒んうと振えて難著と行つた
事のある。なぜ酒の苦しのまでの日比ひで、可ろう度の

北遠物であつた。家は橋詰にして里塚があり、天満の松の一本枯れたのを見た。道遥は二階の席から起つて浪華橋を見ようとした。赤きうまれ人であるのが、何故かと少へて見ると、見後く北の堺北の松北の橋金を剃の道を そつくりであると云つた。自分からも云つた。時無絞味の為る。(別)の眼は流れ表つたことと一致したことがある。雖然の料理代の不満を以て早くから評判であつた。長く大阪に住まるものが流多く行くことの無つた。それが為め自分は流廿三年であつたが、始めて大阪に入つた時を想つて見た大阪を体験した。うけたことがある。自分の親戚花家の料理がよかつた。何の客の仕合であつた。時は料理がよいと云の

でこゝに宴会を開くことすらあつた。自分の庭を行つた剣道場の堂塔のかどやと云ふ家であつた。北家はいとゝ大きな家であつた。世特が盛特なる名物で、細のうまうこんがひどく自分の舌を入つた。

上方の女の無い親無東女人がある、そんな仲居が大阪の偏女と云ふてゐる、どこの剣道場の世を性表す生すことはせず、北の傍世を用ひて配膳から面まやらせる、時うの義妙の代を三味線もひく、神伝のあり美人もある人の妻でもあるものも少うくうまれ枝子だ。面白きまるいろ〳〵ある、義者を拭く

時差手紙から、抜き状を書くことを含い状と云ふのである三寸四方位の紙片に大吸の文字が印刷されてあって誰れでもすぐ故に其くらお出でと云ふやうな文言が書かれてある。電話があつたけれども、其の時分は下を書いてやつたことがある。巻紙へ此のあて状を書いて家に持ち帰り即座に棄てることが多いのである。結局紙屑に成る為に費やされる時間が多いのが、為に溜まると天満宮の祭礼の時焼くやうな出うけて焼き棄てると云ふ支那人が文字を粗略にするの習慣と似て居ると思つたのである。

西洋の政治の中心から議論や喧嘩が多く感情が鋭いのに、商業も論議倒れと云ふ句合が大阪を流れ

榛原製

居るのが、自然に業績に習慣で解る合理的のものがある。大阪が破産するものがあつても三年か四年も経つと多くの回復して元の如くなる筈である。元らもよくなるものがいくらもある。それに何故と云ふと、事業がうまくゆかうが破産しても前と信用者連が厚意を出すけれども行つて帳面をお見せなさいと云ふ、厚意的に推しかけるのが習慣となつてゐるのが習慣となつてゐるのが習慣となつてゐるのが、それと、債権者が皆つてしかつて、敗残の法を講ずる。敗残の為めの其底の自由を検束することもあるが其言を経つて委ねることが常に、それから沿廉が届いて死を免ることが出来る。これは人助けでもあるが、実債

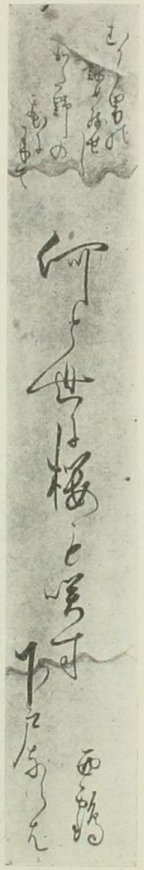
権自身の自衛策である。和泉ひあると、債務者が先
来ちくちくと密載ちくドレイ（訴へる。まるで雖敵の
やくびである。併し左り前こちらと訴訟をやつても、取ん
る筆がちくく、続向債権者も債務者も共潰んで、後流
が無い。こゝらあると流石の大阪商人の利巧ひある、密
易と接吉を受けちへのハ、債務者を復活せしもる
かちびめるまるよい習慣ひあると感じた。
天阪ひ史跡の大ちるものとちくハ大阪城の遺跡ひあちう豊
太閤の母往芸こ成つ人ちるび、豊公殉後寵愛を往遺ハ
愛と悲惨の最後を遂げた、度ち城ちる文ちる人ちる
頃の或と何も存するものがちく、唯ひ聖の巨石を拠
ひ往事を追懐するものひあつたが、今ハ紀念ものとな

天主閣を基礎のまゝ撤去したとふがまゝ美を見る
い。もう一つの史跡ハ四天王寺ひあり、その童塔ハ今尚藝術
として境内を壓してゐる。

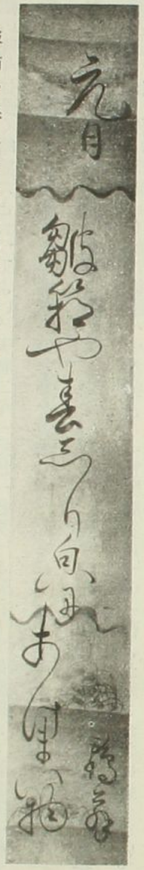
標原制

以下
9丁
白紙

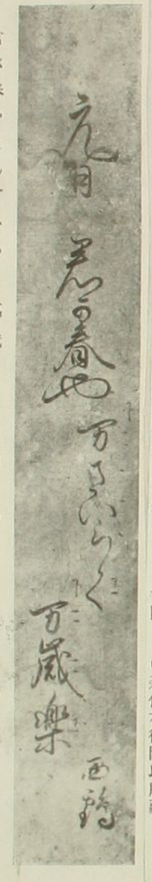
身やふたつよし野もかざり金龍寺　西鶴　（大阪　高梨光司氏所藏）



何と世に櫻も咲す下戸ならば　西鶴　（兵庫　柴田勉次郎氏所藏）



皺箱や春しり貝にあけまい物　鶴翁　大阪　中森作右衛門氏所藏



君が春やまんざいらく萬歳樂　西鶴　東京　池田金太郎氏所藏

閲覧室